

---

# ウルトラマン・THE・EDGE

霜月じゅん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウルトラマン・THE・EDGE

### 【コード】

N0801F

### 【作者名】

霜月じゅん

### 【あらすじ】

近未来。突如現れ、人類を襲う異生命体“ルシフェル”と、人類防護機構・Ark<sup>アーク</sup>の戦いは激しさを増していた。そんな中、アークにも倒せない変異体ルシフェルが現れたことで、人類は滅亡の危機を迎える。絶体絶命の時、光と共に地上に降り立つ三人の巨人“ウルトラマン”。水の巨人“アビス”、炎の巨人“フレア”、そして風の巨人“ハルカ”。今、運命をかけた戦いが始まる。

## Stage - 0 邂逅

雲より遙か上。どこまでも蒼い、高度15000mの成層圏。

今、5機の要撃戦闘機>X-07 アリエル<が、地上へ降下する“ルシフェル”の群れを迎撃しようとしていた。

Ark・極東方面航空団第101要撃隊B小隊。それがこの部隊の名前である。

敵は全長100m近い、ミジンコのような容姿のルシフェル“マザー”が1体。その周りに展開する、5〜10m大で羽虫のような容姿のルシフェル“ラウス”がおよそ50匹。

「B-1より各機へ、まずは光子弾頭弾で前衛のハ工共を一掃。陣形が崩れたスキを突き、マザーへ攻撃をかける！」

「了解！」

1番機に乗る小隊長の小松の指示に隊員達が応える。

「敵集団まで、あと2000m！」

4番機に乗るB小隊の紅一点、梶綾音が言った。

「ちよろい相手だ、俺が瞬殺してやるぜ！」

5番機パイロットの神山陽介が息巻く。

「はやるな陽介。どんな相手にも、油断は禁物だ」

落ち着いた口調で陽介をたしなめたのは、2番機に乗る副長、天宮海である。

B小隊は横一列に並び、徐々にルシフェルとの距離を縮めていく。「攻撃開始！」

小松の号令で光子弾頭弾が一斉に発射され、マザーの前方に密集したラウス達へ向かって一直線に飛んでいく。

弾頭弾はラウスの群れの中で炸裂すると、超高熱の光の粒子を拡散させ、たちまち30匹近いラウスが身体を焼かれて落下していく。陣形が崩れ、生き残ったラウスが四方に散ったことで、マザーの

前方はがら空きになった。

B 小隊はマザーへ突進し、対獣ミサイル“キラービー”と機首のレールガンで攻撃をかける。

「B-3、コアを狙え」

「了解！」

小松の指示を受け、3番機パイットの武藤が機体をマザーの斜め下へ向ける。

コアとは、マザーの下腹部に存在する、赤い水晶体のことである。これを潰せばマザーはおろか、共生体であるラウスの活動も停止させることができた。

マザー自体に攻撃能力はなく、いわばラウスの司令塔のような存在である。ラウスが散った今なら容易にコアを潰すことが可能であった。

「ターゲット、ロックオン。キラービー、ファイア！」

3番機から発射されたキラービーがマザーの下腹部へ飛ぶ。

これでケリがつくと誰もが思った瞬間だった……。

突然、コアの周りから無数の触手が伸びて光線を発射し、ミサイルを防いだ。

「そんな……！？」

武藤が絶句する。触手は後方の3番機へ先端を向けて光線を発射した。

よけきれず、光線を受けた3番機が大爆発を起こす。

「武藤！」

小松が絶叫した次の瞬間、1番機に光線が直撃していた。

「武藤さん、小隊長……！」

綾音が叫ぶ。

「どうなってるんだ？マザーが攻撃を……まさか変種！？」

機体をマザーの上方に回転させながら、海は動揺していた。

「海さん、俺が突っ込んでコアを潰します！」

陽介からの通信が入る。

「待て、ヤツは普通じゃない一旦帰投するんだ！」

「ここで逃げたら、ヤツは地上を襲います、そうってからじゃ遅い！」

通信が切れ、5番機は光線をかわしながらコアへ向かって突っ込んだ。しかし、向きを変えた触手が機体に巻き付き、動きを奪う。

「陽介！」

海は触手に捕まった5番機を見て叫んだ。陽介は触手を振りほどこうと、必死に操縦桿を動かすが、触手は締め付けを強め、機体を軋ませる。

「綾音……お前はこの空域を離れる」

綾音の4番機に通信が入る。

「副長、まさか……」

「陽介を助ける……心配するな、約束は守る！」

海はそう言うと、機体を急降下させてマザーへ向かった。

2番機はマザーへ接近しながらレールガンを発射し、触手を切断していく。

「陽介、今助けるぞ！」

「海さん！」

海の助けに、陽介が喜びの声を上げたその時だった。

マザーは残った触手を振り子のように振り、勢いをつけて5番機を2番機目掛けて放り投げた。

「……！」

咄嗟のことで避けられず、2番機と5番機が空中で激突する。両機は炎を上げながら四散し、落下して行った。

「神山君……副長……」

眼下で起こった惨劇に、綾音は言葉を失った。

綾音、このミッションが終わったら、結婚しよう。だからそれまでは、いや、この先もずっと、何があってもお前を守り抜く。約

束するよ

「海……約束したじゃない……なのに、どうして……」

綾音がやつとの思いで呟いた。

すると、突然警報が鳴り、コクピットの立体レーダーに接近してくる敵影が映し出された。その数20。

ラウスが体勢を立て直し、4番機目掛けて一斉に襲い掛かってきたのだ。

綾音は急いで逃げ出すが、ラウスは追い縋って来て機体の周りを取り囲み始める。

絶体絶命。綾音が死を覚悟したその時だった。

突如、閃光が機体を包み込んだかと思うと、前方から光線がほとばしり、後方のラウスを一掃した。

咄嗟の事態に、綾音は思わずバーニアを止め、機体を空中に静止させた。

レーダーからラウスの影は消えている。

綾音は前を見て呆然となっていた。

そこには機体と対峙するように、“巨人”が直立の体勢で空に浮かんでいたのだ。

「あなたは、一体……」

巨人は4番機の上を飛び越え、マザー向かう。巨人が両腕を交差させる。すると巨人の両腕に付いた手甲から、巨人の身長の倍近くはある、光の刃が生成された。

巨人は風のように飛び、一気にマザーへ接近すると、襲い来る触手もろともマザーを光の刃で両断した。たちまち大爆発を起こしてマザーは消滅し、残ったラウスも全て微粒子となって消えた。

圧倒的な強さであった。

全てが終わった空に、巨人はまた元のように佇んでいた。綾音は4番機を巨人の前方に静止させる。

巨人の身長はおよそ40m、銀色の身体に緑色のラインが入り、胸部と肩が銀色の生体装甲で覆われ、胸の中心には、蒼い涙滴形の水晶体が埋め込まれていた。

顔は無表情で武骨ながら、金色の、水晶のように澄んだ目から優しさが伝わってくるようである。

長く伸びた銀色の髪が風に靡いて、巨人の存在をより神秘的に感じさせた。

巨人はまるで、風に身を任せ、風に溶け込んでいるかのように空に浮かんでいる。

「緑の……風の、巨人」

自然とその言葉が、綾音の口について出ていた。

巨人は黙って綾音を見詰める。どのくらいの時間だったろうか。

巨人は綾音を見詰めたまま、光の粒子となって消えた。

「……………」

静寂が訪れた蒼い空に、機体のエンジン音だけが虚しく響いていた。

## Stage - 1 覚醒

1 .

夢を見た。

半年前から、もう何度も見ている夢。

暗い闇の中に一人佇んでいると、突然目の前に、十歳位の少女が現れる。

あなたは、もう目覚めてる。お願い、早く気付いて

少女がそう言って、背を向けて走り出すと、その先には一筋の光が見える。

追いかけると少女の姿は消え、光が自分に近付いてきて身体が光に包まれる。

次の瞬間、自分は風と一つになり、どこまでも蒼い空を飛んでいる。そして、夢は終わる。

樹ハルカは、いつものように目を覚ました。けたたましい音をたてる目覚まし時計を止める。

AM6:30。ハルカは布団から出ると顔を洗い、簡単な朝食を済ませて身支度を整え、両親の位牌と写真が置かれた仏壇に手を合わせた。

静かである。

郊外の閑静な住宅地に建つ一戸建て。

小さいが一家三人が住むには調度良かった。

しかし10年前に義母が、先日義父が病気で亡くなったため、今この家に住むのはハルカ一人である。

「……行つてきます」



そう言つてリュックを背負い、玄関を出ると、空は雲一つない快晴であった。思わず笑顔になる。

日光を身体に浴び、思い切り背伸びをして深呼吸すると、ハルカは玄関の脇に置かれたマウンテンバイクに跨がった。

「よしっ！今日もがんばりますか」

自分に気合いをかけると、ハルカはマウンテンバイクを走らせ、住宅地の坂を下って行った。

遠くない未来。

人類は、空に潜在的な脅威を抱えて繁栄していた。

十五年前、南極上空の成層圏に初めてその存在を確認された異生命体“ルシフェル”。

その出自、生態は一切不明。只一つ解っていたのは、この飛翔生物は人類に対して明確な敵意を持って行動していることだった。

初めは航空機等を襲っていたルシフェルだったが、やがて巨大なマザーを中心とした群れで地上の都市を襲撃するようになった。

この世界的な災厄に対処すべく結成されたのが、人類防護機構・<sup>アーク</sup>Arkである。

結成以来、アークは独自の科学技術で開発された兵器と戦術を駆使してルシフェルと戦い、世界の空を守り続けた。

極東本部を中心として世界二十カ国に支部を展開し、領空や国境に関係なく活動できる権限を国際的に認められたアークは、激しさを増す戦いの中で人類の守護者としての地位を磐石なものにしていく。

しかし半年前、突如現れた変異体ルシフェルの為に極東方面航空団第101要撃隊B小隊が梶綾音隊員（当時）を残して全滅。

一個小隊が壊滅するという、結成以来なかった惨事はアーク首脳陣を震撼させた。

変異体という新たな脅威の出現によって、戦いは新たな局面を迎

えようとしていたのである。

2 .

千葉県木更津市の臨海部に位置する、アーク極東本部。

この日、一隻の潜水艦が、密かに極東本部内のドックに入港していた。

通常の潜水艦の倍近い大きさのその艦は、平べったい流線形をしており、芸術作品のような曲線美を誇っている。

「これが“エクスマキナ”……綺麗」

ドックに立った、技術参謀の阿川真琴は思わず感嘆の声をあげた。「確かに見た目は綺麗だが、このエクスマキナは君の設計した“ストライカー”シリーズを運用するための特装潜水母艦。立派な兵器だよ、阿川参謀」

皮肉っぽくそう言ったのは、真琴のとなりに立っていた作戦参謀の須藤昌輝である。

「そしてストライカーを使って変異体をやっつけるのが、須藤参謀指揮下の……」

「特務隊“ロメラ”と言うわけさ。だが今の所、変異体ルシフェルに対抗できるのは彼らだけだ。もし今、変異体が大量に現れて世界を襲ったら、人類は終わりだね」

「縁起でもないことを……変異体は半年前に一度現れたきりじゃないですか」

「もしもの話さ……おつ、艦長がお出でだ」

エクスマキナの艦橋に架けられたタラップから、髭面で恰幅のいい白人の中年男性が歩いてきた。艦長のボガード参謀である。

元は国連海軍の潜水艦乗りで、見た目通りの荒くれで通っていた。「ボガード参謀には悪いが、艦の美しさと反比例している。いつそ君が艦長の方がしっくり来そうだが……」

「おだてた所で何も出ませんよ」

「こりゃ失敬」

真琴に軽くあしらわれた須藤は、苦笑いを浮かべつつボガード艦長を出迎えた。

数時間後。極東本部内の地下格納庫の一角に設けられたコマンドルームに、六人の隊員が集まっていた。

着ている隊員服が、彼らが特別な立場にあることを物語っている。

通常、アークの隊員服はライトグレーの上下にアクセントとして黒いラインが入り、黒のベルトとブーツを着用する。

だが彼らが着ているのは、同じ仕様ではあるが上下共に黒く、ラインは金色、着用しているベルトとブーツの色はアイボリーホワイトである。

「エクスマキナ。入港したようですね」

眼鏡をかけた細身の隊員、藤原直也が言った。

「あれがワタシ達のマザーシップになるんですネ！」

小柄な黒人の女性隊員、アンリ・ヴァレットが尋ねた。

「ああ、来週にはストライカーシリーズを搭載する」

隊長の佐沼士郎が答える。

「こつこの日本のことわざで、鬼に……ええと……」

大柄でがっしりとした隊員、王徳明が口を開くが言葉が出てこない。

「金棒でしょ」

困惑する王に、副長が助け船を出す。

「それです、副長。あいやあ、お恥ずかしい」

面目なさそうに頭をかく王を見て、副長の梶綾音は思わず微笑んだ。

「とにかく、後は敵が現れるの待つだけネ！」

「アンリ、不謹慎だぞ。我々“ロメラ”の出番がなければ、それに越したことはない」

佐沼にたしなめられ、アンリは気まずそうに、綾音に舌を出して見せる。

「まあ、これだけの装備を前にすれば、逸るのも仕方ないが……」  
コマンドルームの窓から階下のハンガーを眺めた佐沼の言葉に、緊張していた空気が一気に緩み、皆が笑い出した。

「隊長、あなたこそ不謹慎ですよ」  
デスクで作業をしていた二十歳前後の隊員がボソリと言い放ち、皆が静まる。

隊員の名は志田光一。一ヶ月前にアラスカ支部から転属してきた新入隊員である。

光一は作業を終えるとパソコンを畳んで立ち上がった。

「……」  
佐沼はきまりが悪そうにあご髭を弄る。

コマンドルームを出ていく光一の後ろ姿に、綾音は溜め息をついた。

3 .

美園市の郊外にある、あすなる保育園。そこがハルカの職場である。

庭では園児達が、元気よく走り回ったり、遊具で遊んでいる。その様子を見守る先生達の中に、ハルカはいた。

いや、むしろ園児達の中に混じって遊んでいる、と言った方が正しいかもしれない。

五人いる園の先生の中で、一番人気のあるのがハルカだった。いつも子供達から引っ張りだこである。

「こらこら、袖を引っ張らない！」  
笑いながら、服を引っ張る園児をたしなめる。  
その時だった。

あなたはもう目覚めてる

突然、声が聞こえた。夢に出てくる少女の声。

驚いたハルカは、立ち上がって辺りを見回すが、少女の姿はどこにもない。

茫然と立ち尽していたハルカは、エプロンの裾を園児に引っ張られたことで現実へ引き戻された。

「せんせえ？」

「……ああ、ごめんごめん」

子供達に笑顔を見せると、ハルカはまた一緒に遊び始めた。

同じ頃、須藤は長官室に呼び出されていた。

目の前にはマホガニーの机。その奥の椅子にはスキンヘッドの初老の男が座っている。

男の名はルーク・青柳。アークの総司令官である。

「……“財団”から指示があった。この人間の身柄を拘束し、アークの管理下に置くようにとね。今諜報部が動いてる……」

青柳はそう言うと、薄い書類の束を須藤に渡した。

「これは……」

須藤は渡された書類を見てぎょっとした。

「一体財団は何を考えているんだ、君は何か聞いていないのか？」

「

「いいえ、私は何も……」

「そうか。それにしても、半年前に変異体が現れてからの、財団の動きがよく分からん。君を前にして言うのも何だが、我々の進める反攻作戦にも否定的なようだしね」

「“オペレーションX”にですか？」

青柳はゆっくり頷く。

「この計画は何としてもやり遂げねばならん。彼らの意向に背いてでも」

「……」

「君には悪いが、ロメラの指揮官から外れてもらう。この計画にはロメラの存在が不可欠だが、指揮するのが財団の人間では……」

「総司令、私は……」

須藤が言おうとするのを、青柳がさえぎる。

「人類全体のことを考えれば、最早財団の意思には従えんのだよ」

「なるほど。どおりで……アラスカの特務機関から新入隊員が配属されたことも、私には知らされないわけだ。わかりました」

須藤はそう言って青柳に一礼をすると、無言で長官室を後にした。

「ハルカ先生、もう少しお休みしてもよかったのよ……お父様が亡くなられたばかりで大変なのに」

夜9時近く。最後の子供が帰り、仕事が終わった後の職員室で、先輩の皆戸めぐみが帰り支度をしながら言った。

「いえ、大丈夫、大丈夫。毎日子供達から元気をもらってますから、休んでる方が逆におかしくなっちゃいますよ！」

ハルカは笑顔を作ってみせた。皆戸もつられて表情を緩めてしまった。

「そう、ならいいんだけど。まだ若いからって、無理はしちゃダメよ」

「はい。ありがとうございます」

皆戸が帰り、職員室に一人残ったハルカは、天井を見上げて溜め息をついた。

別に疲れている訳ではない。ただ、昼間の声のことが気がかりだったのだ。

「気のせい、気のせい」

そう自分に言い聞かせ、ハルカは家路についた。

「この家で間違いないんだな？」

美園市郊外の丘の上にある住宅地。とある家の門前に立ち、アー  
ク諜報部員の林はパートナーの森に尋ねた。

「はい、間違いありません。指令書に書かれた住所と一致してま  
す」

「それにしても名前と住所しか書いてないってのもなあ……  
顔写真とかないの？」

「どうもそつちは入手できなかったようですね」  
林の眉間にしわが寄る。

「まあ名前の感じだと、うら若き乙女っぽいよな」  
ニヤニヤしながら言う林に、森は困惑した。

「はあ……とりあえず、早く帰ってこないですかねえ。  
夜中にスーツでグラサンの男二人。怪しすぎますよ」

森がそう言った時、二人の後ろで自転車のブレーキをかける音が  
した。

二人が振り返ると、そこにはマウンテンバイクに跨った二十歳前  
後の青年がいた。

「あの、家に何か御用？」  
青年の、大きく開いた目に見つめられ、二人は言葉に詰まる。

「ええっと、あの、樹ハルカさんのお宅はこちらでしょうか？」  
やつとこのことで林が口を開く。

「はい」  
「じゃあご家族の方？ハルカさんはいつお帰りになるかご存知で  
すか？」

矢継ぎ早に質問してくる森に当惑しつつ、青年はぼそりと言った。  
「あの、ハルカは俺ですけど」

時間が止まる。が、すぐに、  
「え……男!？」

林と森は同時に驚いた。2人の反応を見たハルカは、もう慣れている、といった感じで溜息を付いた。

「そう、男。よく間違えられるけど、俺が樹ハルカです！」  
ハルカは堂々と言い放った。落ち着きを取り戻した林と森は、互いの顔を見合わせて頷く。

「失礼しました。実は、突然なんですが我々に同行願います」  
林はそう言うと、森と一緒にハルカへ掴みかかった。

「は！？どういうことだよ、おい！」

わけが分からず、抵抗しようとするハルカ。しかし、森が拳銃型の注射器で首筋に麻酔薬を打ち込んだため、意識を失ってその場に昏倒してしまった。

「こちら林、ターゲットを確保。これより本部へ移送します」  
林が通信を行い、その間に森がハルカを車へ放り込む。

3人を乗せて走り出した車は、そのまま夜の闇に消えていった。

翌日の昼。極東本部は喧騒の中にあった。

夜明け前から、日本の上空にルシフェルの群れが大量に現れ、各地を襲撃していたのだ。

その迎撃の為、戦闘機隊がひっきりなしに、出撃と帰還を繰り返していた。

「紀伊水道沖にルシフェル出現。数、およそ100」

「秋田市上空のルシフェル、さらに増加中」

「札幌上空、新たにマザーが三体出現。第402要撃隊が応援を求めています」

「広島基地との連絡、途絶！」

「第301偵察隊より報告、北九州基地が降下したラウスの大群により壊滅。航空機の離着陸不能、大規模な火災が発生しています！」

「須賀川基地、円谷司令応答願います！円谷司令……」  
次々にもたらされる報告。錯綜する情報。CICは混乱し始めて



いた。

「中華支部に救援を要請しろ、待機中の航空部隊を降下したルシフェルへ回せ……クソっ、一体何がどうなってるんだ！」

「苛立ちを隠せず、青柳は叫ぶ。」

「総司令、名古屋上空で迎撃にあたっていた第758要撃隊、A」

「F小隊が全滅。ルシフェルが市街地へ降下しました！」

「これは……変異体!?」

そこに映っていたのは、名古屋市街地の上空に浮遊する、全長50m程で白いクラゲに似た生物。

今までに人類が出会ったことのないルシフェルだった。

「ロメラに出動命令……ストライカーを出せ！」

5 .

コマンドルームにアラートが鳴り響いた。

ロメラの隊員達がハンガーへの階段を駆け降りていく。

ハンガーには特異な形状の戦闘機が三機、出撃のときを待っていた。

この三機が変異体ルシフェル撃退用兵器、超次元統合戦闘機群“ストライカー”である。

長いフロントノーズが特徴的な高速戦闘機“ストライカー1号”。

両翼のダクトドファンにより、空中での複雑な動作も可能な汎用機“ストライカー2号”。

両翼にミサイルランチャーを装備し、三機中で最大の火力と大きさを誇る重爆撃機“ストライカー3号”。

三機ともに共通しているのは、ロメラの隊員服と同じボディーカラー。そして機体後方に円筒形の大型エンジン“ジェネレーター”

をむき出しの状態で搭載している点であった。

アーマードベストを着込み、ヘルメットをかぶった隊員達は、2人づつに分かれてストライカーに乗り込んだ。

1号にアンリと藤原、2号に佐沼と王、3号に綾音と光一。

「ストライカー、発進しました」

CICのモニターに、空へ飛び立つ三機のストライカーが映し出される。

「……………頼むぞ」

青柳は祈るように言った。

「ここアークの基地なのかよ？」

ハルカは、鉄格子の外に立つ監視の兵士に言った。だが兵士は聞く耳持たず、といった様子である。

目が覚めると、ハルカは独房に監禁されていた。

なぜ自分が拘束されねばならないのか、ここがどこなのか、全く分からなかった。

ただ、監視の兵士の着ている制服から、アークの基地らしいことは推測できる。

「なんかさつきから、表が騒がしいんだけどさ、どうなってんの？」

ハルカがもう一度、兵士に語りかけたその時だった。

突然電気が消え、ドオオオオオン！という凄まじい音とともに天井が崩れ落ちてきた。

「ひつ……………!？」

天井の下敷きになり、ハルカは再び意識を失った。

名古屋市街地上空。

三機のストライカーが変異体ルシフェルと交戦していた。

相手は空中に静止しているが、ストライカーの攻撃に反応して

傘上の頭部を発光させて光線を放射してくる。

1号機が錐揉み飛行で光線を交わしながら、敵の懐に光子ブラスタを発射して急上昇する一撃離脱攻撃を繰り返す。

そして2号機と3号機がミサイル攻撃でそれを援護する。

「あいやあ、あのクラゲ野郎、全然応えてないよお！」

2号機を操縦する王が悲痛な声を上げたときだった。突然、コクピットへ通信が入った。

「佐沼隊長、聞こえますか？」

「阿川参謀！」

佐沼は仰天した。ディスプレイに、額から血を流して通信を送る真琴の姿が映し出されていたのだ。

「何があつたんです？」

「あなた達が出撃してすぐ、本部が変異体の急襲を受……………」

画像が乱れ、ノイズが入る。真琴の背後は暗く、時折火花が散るのが見えた。

「奴ら、突然本部の直上に……………全くの不意打ちで、レーダーにも……………外部との通信回線も途絶……………何とか非常回線をつないで通信してるけど、何時まで持つか」

「CICはどうなつたんですか？青柳総司令は？」

「わからない……………本部内にもラウスが多数侵入して……………」

通信が途絶え、画面が真っ黒になった。

電気が消え、崩れかかった技術士官室で、真琴はがっくりと肩を落とした。

「とにかく、外に出ないと」

真琴は廊下へ出る。崩れた天井とガレキ、そして兵士の死体が転がっていた。

時折、切れた電線から噴出す火花が、煙の立ち込める暗い廊下を

青白く照らす。その明りの中に、一つの人影がたたずんでいるのが見えた。

「……………須藤参謀!?!」

それは須藤の後ろ姿だった。真琴の声に気づいた須藤はゆっくりと振り返る。

「……………」

振り返った顔には、邪悪な、冷たい笑みが浮かんでいた。自分の目を見つめてくるその顔に、真琴は戦慄を覚えて立ちすくんでしまった。

須藤は顔を背けると、そのまま煙の中へ歩いていく。

「須藤参謀!」

真琴は後を追おうと走り出したが、目の前に天井と柱が落下し、行く手をふさいだ。

埃がおさまり、前を見たときには、既に須藤の姿はなかった。

6 .

「梶、志田。3号機は直ちに戦線を離脱し、本部へ急行せよ!」

「了解!」

佐沼の命令に綾音と光一は頷き、3号機をルシフェルから遠ざけた。

「これより“ジョウント”で本部へ向かいます。 ジェネレータ

起動、シフトD!」

3号機の ジェネレータが唸りをあげた。内部の基軸が回転し、金色の粒子が噴出する。

「志田隊員は初めてよね、ジョウントは?」

操縦席の綾音は、後ろに座る志田に尋ねた。

「空間転移飛行ですか……………ええ」

「少し揺れるわよ!」

粒子は空中に集まると、3号機の前方に巨大な光の輪を作り出す。

「ジョウント、イン！」

輪の中に突入した3号機は、跡形もなく消えた。

そして次の瞬間、3号機は極東本部の上空に姿を現していた。

「何これ………」

「極東本部が、全滅!？」

目の前に広がった光景に、二人は絶句した。

かつて、堂々たる威容を誇っていた極東本部の建物はことごとく倒壊し、炎と黒い煙を空へ噴き上げていた。

飛行場の滑走路にはアリエルをはじめ、破壊された航空機の残骸と、ラウスの死骸が幾つも散乱している。

港に停泊していた船舶は炎上し、広大な本部基地全体が黒煙に覆われているようであった。

人類の守護者、アーク。その象徴ともいえる極東本部が今、変わり果てた姿をさらしている。

そして基地を破壊した張本人が、突然現れた3号機を見上げていた。

「こいつ、二本足で歩いてる………これが」

「変異体………」

身長およそ50m。黒っぽい体色をして尻尾の生えた、人間のミイラに似た姿のルシフェル。

頭部には三つの目がギョロギョロと動き、周りをラウスが飛び回っている。

「副長………」

「攻撃開始よ！」

怒りを露わに、綾音は叫んだ。

7 .

1号機と2号機は、絶体絶命の状況にあった。

ルシフェルの触手に絡めとられ、身動きが取れなくなっていたの

だ。

触手が徐々に機体を締め付け、脱出も不可能になっていた。

「チクシヨウ、こんな所で終わっちゃうのかよ！」

「藤原隊員、落ち着ク！」

動揺する藤原をアンリがなだめる。その時だった。

突然、眩い光が二つ走り、触手が切れて機体が自由になる。

「何だ!？」

「全機、急速上昇！」

佐沼の号令で、1号機と2号機が高度を上げてルシフェルから逃れる。

光が消えた時、隊員達は目の前に現れた存在に驚愕した。

「あれは……」

そこには二体の巨人が、空からゆっくり降りてきて、空中に静止していたのだ。

どちらも身長40m程で、銀色の身体と、胸に丸くて蒼い水晶体をつけ、無表情な顔に澄んだ金色の目をしている。だが、それ以外は全く違っていた。

一体は身体に、赤い焰を連想させるようなラインが入っている。頭部にも赤いトサカ状の突起があり、それが背びれのように腰まで延びていた。

もう一体は身体のラインが青く、肩胛骨から胸の水晶体の下にかけて黒いラインが入っている。その黒いラインのフチを、さらに金色のラインが囲っていた。

「コイツらも変異体？」

王がびくびくしながら巨人を眺める。佐沼は呆然としながら口を開いた。

「このことが、梶が見たというのは……」

二体の巨人は、ルシフェルと真っ向から対峙していた。

あなたはもう目覚めてる。お願い、早く気付いて

少女の声が聞こえ、ハル力は目を覚ました。

辺りは真つ暗で何も見えない。身体の上にガレキが覆いかぶさり、下半身の自由が利かない。辛うじて、両腕が使えた。

どうやら自分は、仰向けの状態で下敷きになっているのが分かった。

「俺……死ぬのかな？」

そうつぶやいた時、目の前に靄のような光が集まってきて周囲がぼんやりとだが見えなくなった。

「……何だ、これ？」

その光は一点に集まると、次第に何かを形作っていく。

「……！！……」

目の前に、夢に出てくる少女が浮かんでいた。少女の周囲を、光が包み込む。

「キミは……」

- あなたはもう目覚めてる

少女は言葉を発していない。だが心の中に、その言葉が響いてくる。

「何のことなんだ？」 ハル力は右手を伸ばして少女へ問いかけたが、少女はただ微笑むだけだった。

そして少女は、ハル力の右手に自分の右手を重ねる。すると少女の身体は再び光へ戻り、ハル力を包み込むように一体となった。

8 .

しばしの沈黙の後、ルシフェルは巨人達へ向かって光線を放射した。

巨人達は二手に別れて光線を避けると、互いに顔を見合わせて頷

き、ルシフェルへ飛び掛かって行く。

「変異体と戦おうってのか」

藤原が食い入るように二体を見詰める。

赤い巨人は光線を掻い潜ると、拳を赤熱化させて炎を上げた。そしてその拳で、ルシフェルへ連続パンチを叩き込む。

青い巨人は両腕を伸ばすと胸の前で交差させ、勢い良く開いた。すると腕を開いた軌跡の水蒸気が鋭い刃を形作り、ルシフェルへ向かって翔ぶ。

水蒸気の刃は、十本近くあるルシフェルの触手を根元から切断すると、気化して消滅した。

触手を斬られ、ルシフェルの戦力は半減したようだった。ルシフェルは悪あがきのように光線を乱射する。

赤い巨人は地上を降り立つ。そして青い巨人はルシフェルの斜め上に静止し、地上と空からルシフェルを挟む態勢になった。

青い巨人は、再び両腕を胸の前で広げる。胸の水晶体の前に、青白い粒子が集まって光弾を作り出す。

巨人は光弾から後ずさると、バレーのアタックのようにそれをルシフェルへ打ち込んだ。

光弾はルシフェルの頭部へ命中し、光線の放射器官が一瞬で氷結し、破裂する。

光線の乱射が止んだのを確かめ、赤い巨人は両腕をし字に開いた。すると頭のトサカから、炎が立てた右腕を伝うように立ち昇る。

炎がルシフェルのいる高度まで延びると、赤い巨人は勢い良く頭を振り回し、それを叩きつけた。

超高熱の炎を喰らったルシフェルは、「キイイイッ！」という断末魔をあげて爆発し、跡形もなく消えた。

「So, cool!」

「圧倒的だぜ！」

アンリと藤原が感嘆の声を上げる。

青い巨人は地上に降りると、赤い巨人に駆け寄る。向かい合った



二体はハイタッチを交わした。

「アイツら、人間と同じ知性を持つてる……」

二体を見下ろして佐沼が呟く。

戦いに勝利した二体の巨人は空へ飛び上がり、そのまま彼方へ消えていった。

後には、戦いの終わった市街地上空を旋回する、二機のストライカーだけが残された。

9 .

胸の鼓動が早く、強くなっているのがわかる。

ハルカの脳裏に、夢のイメージが流れ込んでくる。

風と一体になって空を飛ぶイメージ。

いつも夢はそこで途切れていた。だが今度は違う。

飛んでいく先に、何かが見える。

それはアークの戦闘機だった。それを追うようにラウスが飛び交い、奥の方には巨大なマザーがいる。

ハルカの両腕から、光の刃が伸びる。

その刃で、ハルカはマザーを斬り裂いた。腕に感触が蘇る。

「そうだ。あの時、俺は……夢じゃなかったんだ」

アークの戦闘機に乗っていた女性隊員と目が合う。次の瞬間、外の光景が脳裏に流れ込む。

見慣れない戦闘機が、ルシフェルを攻撃していた。操縦しているのは、あの女性隊員……。

「副長、もうミサイルがありません。ロケット弾も、光子弾頭弾も全て撃ち尽くしました！」

「まだ光子ブラスターがある、最期まで諦めちゃ駄目よ！」  
綾音は渾身の力を込めて、操縦桿のトリガーを引く。

3号機の全弾と光子ブラスターを喰らいながらも、変異体は怯む

様子もなく、三つ目から赤い光線を発射してくる。

遂に光線が、3号機の左翼に直撃した。

「チクシヨーツ！」

綾音の叫びと共にストライカー3号は操縦を失い、滑走路へ胴体着陸する形で墜落した。

10.

胸の鼓動がさらに激しくなる。

墜落した戦闘機に、ルシフェルが近付いて来る。

「駄目だ、このままじゃ……力、もう一度あの力を！」

あなたは目覚めた

ハルカは目を開く。

次の瞬間、瞳が緑色の光を放った。

「うおおおーっ！」

身体に力がみなぎり、ハルカの身体が緑色の光に包まれる。  
ハルカは緑色の光になり、空へ向かって飛び出していた。

「痛……副長、大丈夫ですか？」

光一は操縦席の綾音に語りかけた。が、反応がない。

綾音は気絶していた。

「副長！」

光一は綾音を揺さぶる。

「志田隊員……！」

綾音は意識を取り戻し、光一を振り返った。

「変異体は？」

光一に問いかけたその時、地面が揺れた。

綾音は外を見ると、変異体の足が迫って来ていた。

「逃げましょう、早く！」

光一がキャノピーを開けようとしたが、墜落のショックで故障し、開けなかった。

「もう……駄目なの？」

綾音が目を瞑って下を向いた時だった。

突然、基地のガレキの中から、物凄い勢いで光が噴き出した。

変異体もそちらに気を取られて振り向く。

空高く噴き上がった光は、空中で形を作っていく。

「何だ？」

光一が目を丸くする。

「あれは……」

姿を変えた光に、綾音は息を飲んだ。

40m位の身長。

銀色を基調に緑のラインが入った身体。

胸と肩、両腕を守る生体装甲。

胸の中心に光る、蒼い涙滴状の水晶体。

そして、風に靡く銀色のロングヘア！

「あの時の……」

それは紛れもない、綾音がかつて空で出会った存在だった。

「緑の……風の巨人」

空中に浮遊する巨人は、澄んだ金色の目で綾音達を見下ろしていた。

## Stage - 2 再会

1 .

ハルカは、自分が異形の巨人に変貌していることをはっきりと自覚していた。

だが、不思議と恐れはない。

ハルカはゆっくりりと、滑走路へ舞い降りた。

それを見た変異体が自分へ向かって襲い掛かって来る。

(…………行くぞ！)

戦闘機の無事を確認すると、ハルカも変異体へ飛び掛かっていった。

機械が復調し、キャノピーが開いた。

綾音と光一は急いで3号機から降りる。目の前では、巨人と変異体の戦いが繰り広げられていた。

「やっぱり、あの時と同じ。私達を守ろうとしてる……………」

緑の巨人と変異体は、拳と蹴りの応酬を繰り返していた。だが一瞬の隙をつき、巨人の後ろに回り込んだ変異体が後ろ髪を掴んだ。

「……………」

変異体に引き摺り倒された巨人は、地面に背中を打ち付けて悶絶してしまった。

変異体は巨人へ股がると、両手で首を絞める。苦しむ巨人。胸の水晶体が赤く点滅を始める。

すると突然、滑走路の目と鼻の先に広がる海面が隆起し、轟音とともに巨大な潜水艦が浮上した。

兵器とは思えないような曲線美と、平べったい剣のようなフォルム。船体後方でアーチを描く尾翼。

その独特な形状の艦に、綾音と光一の視線はくぎ付けになる。

「あれは……」

「エクスマキナ、無事だったのね！」

エクスマキナのサイロが開き、空へ向かってミサイルが射ち出される。

ミサイルは空中で放物線を描くと、変異体の背中に直撃した。

変異体が攻撃にひるみ、巨人の首への締め付けが弱まった。

巨人は変異体を押しつけて立ち上がると、素早い身のこなしでバツク転を行い間合いをとる。

変異体が怒り狂ったように天空へ向かって獣のように吼えた。

すると周りを飛んでいたラウスが球状に集まり、エクスマキナへ襲い掛かった。

対するエクスマキナは光子弾頭弾を発射して空中に炸裂させた。

さらに甲板上の気密シャッターを開放して四基の対空掃射砲システム“ベルセルク”でラウスを迎撃する。

巨人は変異体を見据えた。

「何を始める気？」

巨人は胸の前で両腕を交差させると、そのまま空中でドリルのように回転し始めた。

回転は勢いを増し、残像で巨人の姿が分からなくなる。

回転によって起こった風が巨人を中心に集まりだし、一瞬で巨大な竜巻を作り出した。

ガレキを巻き上げながら、竜巻は変異体を飲み込み、その巨体を空高く舞い上げる。

そして巨人が回転を止めて竜巻が消えると、変異体は真つ逆さまに落下を始めた。

「オオオオオーッ！」

うなり声とともに巨人の両腕の手甲から光が噴出し、刃として実体化する。

「光の……刃」

光の刃を引っさげた巨人は、落下してくる変異体へ向かって飛ん

だ。

巨人は刃を構えると、変異体の身体を十字に斬り裂く。刃はコアも寸断した。変異体は断末魔を上げ、落下しながら大爆発を起こして四散する。

同時にラウスも、全て微粒子となって消滅した。

そして巨人は、再び光の粒子となり、粒子は人間大に凝縮すると地上へ舞い降りる。

「あれは……」

綾音は言葉を失った。

粒子が降り、光が消えた場所には一つの人影があった。

「人間!？」

「行ってみましょう!」

綾音が駆け出し、光一もそれに続いた。

2 .

そこには一人の青年が立っていた。背はそれほど高くはない。

全体的に線の細い体つきであることが遠目にも分かった。

光一は、腰のホルスターから拳銃を抜いて青年へ向ける。

「やめなさい」

光一の右腕を掴み、綾音は制止した。

「しかし副長、人間に化けたルシフェルの可能性も……」

「……大丈夫よ」

綾音は青年へ向かって、ゆっくりと歩み寄った。

すると、綾音と光一に気付いた青年が二人へ顔を向けた。

自分を見詰める、青年の大きく澄んだ瞳に綾音は思わず息を飲んだ。

まだ幼さが残る、中性的な顔立ちに惹き付けられそうになりながら、綾音は口を開いた。

「あなたが、あの巨人なの？」

綾音の問いかけに、青年は人懐っこそうな笑顔で頷く。

「あなた、名前は？」

「樹、ハルカ」

青年はそう名乗ると、そのまま地面へ倒れ込んだ。

突然のことに動転しつつ、綾音は青年へ駆け寄る。

「大丈夫？」

綾音は青年を抱き抱えた。

「ごめん、ちよっと目が回っちゃって……お姉さん達、無事でよかつ……た」

青年はそう言うと、目を閉じて首をガツクリと垂れる。

「しつかりしなさい！」

綾音は青年を揺さぶるが反応がない。

意識を失ったようだった。

綾音と光一はどうすることもできず、途方にくれる。と、その時だった。

「梶副長！」

エクスマキナの方から声が聞こえ、綾音は視線をそちらに向けた。

エクスマキナの甲板上に、ロングヘアの頭に包帯を巻いて赤ブチの眼鏡をかけ、幹部の制服を着た三十歳前後の女性が立っていた。

「阿川参謀……」

技術参謀の阿川真琴だった。

「さっきのあれが、あなたが出逢ったという巨人なの？」

真琴の問いかけに、綾音は無言で頷いた。

「その子は……」

真琴は青年に視線を移す。

その時、突然上空に光の輪が二つ現れ、それぞれの中からストライカー1号、2号が飛び出してきた。

「隊長達だ！」

光一の表情が晴れる。

エクスマキナの周りを旋回すると、1号機は機体下部からスチールジェットを噴射し、2号機は両翼を90°回転させてダクテッドファンを地面と垂直にむけ、3号機の側にゆっくり着陸した。

「参謀、彼を早く医務室に！」  
綾音の嘆願に、真琴は頷いた。

3 .

「……じゃあ、その巨人達が変異体を倒した、というわけね」

佐沼の報告を聞いた真琴が、確認するように言った。

エクスマキナ艦内のブリーフィングルーム。

壊滅した極東本部から、命からがら脱出できたクルー達と、ロメラの隊員達が顔を突き合わせて善後策を話し合っていた。

クルーは総勢30人。内エクスマキナの乗員が11人で、後は極東本部の隊員である。

そして皆、大なり小なりの怪我を負っていた。

状況は最悪である。極東エリアはおろか、各国のアーク支部との通信も途絶していた。

青柳総司令以下、アーク首脳陣の参謀達の行方と安否も定かではない。今の所生き残っている参謀は、真琴が只一人である。

「ボガード艦長も副長も、皆死んじまった。司令部の参謀達が無事とも思えねえ……」

拳を握り締め、悔しげに言ったエクスマキナの航海長・ロジンスキーの言葉に、本部のオペレーター・寺沢楓が同意するように頷いた。

「ラウスが地下最深部まで侵入して来て、CICも皆やられてた……私達だってラウスと入れ違いに地下ドックのゲートを破って来たのよ」

隊員達の間にも、重苦しい空気が広がる。

極東本部の壊滅。



それはアークの敗北と同時に、人類の滅亡を意味するに等しい。

「とにかく、当面は我々だけでことに当たるしかありませんね……」

佐沼の言葉に、皆が頷いた。

通信士の氷室がラジオの電波を受信した。各地の被害状況を伝えるニュースが流れる。

そのニュースは、名古屋市内にある避難所の一角にも流れていた。

「まさに惨憺たる状況、ってやつですね」

ニュースを聞く人々の中にいた青年が、隣に立つ長髪の青年に言った。

青年は彫りの深い顔で、コーンヘッドにした髪を金に染めている。

「ああ、だがこれで終わると思えん」

長髪の青年は落ち着いた口調で言った。

190cm近い長身で、整った顔立ちをしているが、どこか憂いのある目付きをしている。

「また変異体が現れるとでも？」

「ああ、恐らくな……」

長髪の言葉に、金髪は腕を組んで考え込んだ。

するとそこへ、自衛隊のトラックが停車して食糧の配給を始めた。その側ではボランティア団体が炊き出しを始めている。

「……まあいずれしろ、腹が減っては戦ができぬ。夕飯もらってきます」

金髪は無邪気に笑うと、トラックの方へ駆けて行った。

長髪はその後姿を見て苦笑しつつ、首から下げたロケットペンダントを手にとり、おもむろに開いた。

「無事でいてくれよ……綾音」

星が流れる、雲一つない夜空だった。

木更津沖に停泊するエクスマキナの船体が月の光を浴びて蒼く輝いている。

艦内の格納庫にはストライカーが収容され、3号機の修理が行われていた。

そこへ髪をオールバックにして無精髭を生やし、厳つい顔をした三十代後半位の男が入ってくる。

「お、佐沼隊長！」

若い整備員達に指示を出していた整備長の熊坂大輔が男：佐沼に気付き、声を掛けてきた。

「どうですか具合は？」

佐沼の視線は3号機に注がれる。

「見ての通りだよ。主翼がグッシャグシャになっちまってるからな……徹夜で間に合うかどうかって感じだな」

「そうですか……」

「さっきから阿川参謀も来て手伝ってくれてるよ」

「参謀が!?!」

驚いた佐沼が3号機をよく見ると、機体後部の ジェネレータの影に、上着を脱ぎ、ワイシャツの袖を捲って作業に没頭する真琴がいた。

「やっぱりあれだな、自分が設計した機体だから黙っていられないんだろ」

熊坂が感慨深げに言う。

佐沼に気付いた真琴は作業を止めると、上着を片手に近付いて来た。

「ただCICにいるのも落ち着かなくてね……私って元が技術屋だから、つい……」

真琴はバツの悪そうに言った。

「そうでしたか」

「それにストライカーには父と私、親子二代の血が流れている、だ

から余計にね……」

そう言うと真琴は顔を伏せた。

「阿川恭平博士……」 ドライヴ理論”の提唱者でしたね」

ドライヴ理論。それは大気中に存在するニュートリノを、タキオンと同質にして原子力にも匹敵するエネルギーを秘めた“ウルトラ粒子”へ変換するというものだった。

「理論は最初、誰からも認められなかった。父は失意のうちになくなったけど、アークの科学力がその実用化を可能にしてくれた」

「そして開発されたのが、ウルトラ粒子を動力源とする半永久機関

“ ジェネレータ”というわけですね」

佐沼の言葉に、真琴は黙って頷く。

「ところで、各国の支部との交信ですが……未だに連絡がつかません」

「そう……やはり通信衛星が機能していないということかしら？」

真琴はそう言うと、佐沼とともに天井を見上げた。

その頃、エクスマキナの甲板上ではアンリと藤原が夜空を眺めていた。

「あ、また流れた！」

アンリが流れ星を見付けて嬉しそうに言った。

「今夜はバカに多いな……」

藤原はポケットからタバコを出して口にくわえる。

「お前も吸うか？」

「No、ワタシまだ未成年だよ！」

「おっと、そうでした……」

藤原はタバコの箱を引っ込めると一服吸い、大きく煙をはいた。

「なあアンリ、俺達これから、どうなるんだろうな？」

「……わかんない。ただ、目の前に現れる敵に、立ち向かっていくしかないと思う。ワタシ達、アークの隊員だから」

「……前から気になってただけだよ、この組織の名前ってどうい

う意味なんだろ？」

「アーク、日本語で言うと“方舟”、ルシフェルから人類を救う方舟ネ！」

「方舟か……まあ、今となっちゃ泥舟だがな」

それを聞いた瞬間、アンリは藤原の脇腹に肘打ちを入れた。

「痛って！何すんだよ！？」

藤原は腹をさする。

「どうしてそんなコト言う？ワタシ達が諦めずに希望を持ち続ければ、少なくともこの艦は方舟だよ！」

膨れっ面になったアンリの目には、うつすらと涙が浮かんでいる。

藤原はハツとして、思わず目を伏せた。

「そっだな。お前の言うとおりでしょ……すまん」

藤原の言葉を聞き、アンリは機嫌を直したように微笑む。

「……うつん、ワタシこそ、ゴメン」

藤原はホツとしたように夜空を見上げた。また星が流れる。

「……これ本当に流れ星か？」

5 .

夢を見た。

毎晩のように見ている夢。そしてそれは日に日に鮮明さを増している。

崩壊した都市。紅蓮の炎が空を赤く染める。

世界の終焉。

地獄絵図と呼ぶにふさわしい光景が延々と広がり、最早生命の存在も感じられない。

その様子を、空の上から直立の姿勢で眺めている巨人がいた。

銀色の身体に緑色のラインが入り、両腕の手甲から金色の光の刃が伸びる。

そして、銀のロングヘアーが燃え盛る都市の熱風に靡き、巨人の

存在をより禍々しいものに感じさせる。

巨人は両腕の刃を振り上げ、燃える街をさらに破壊すべく急降下していった。

「・・・・・・・・」

避難所の壁に寄りかかり、座った状態で寝ていた長髪の青年は目を覚ました。

寝汗がひどい。額の汗を右手で拭くと、彼は大きく深呼吸をする。

「大丈夫ですか？……大分うなされてましたけど」

顔を上げると、そこに金髪の青年が立っていた。

「大丈夫だ。いつもの夢だよ」

そういいながら長髪は、腕の時計に目をやる。午前1時を回っていた。

長髪が溜め息をついた時、不意に背筋に衝撃が走った。

「……！」

脳裏に、空から降りて来るルシフェルの群れのイメージが流れ込んで来る。

金髪を見ると、こちらと同じような反応を示している。

「おい、お前も感じるか？」

「はい。変異体じゃないけど、かなりデカイ群れが二つ……」

「ああ、一つは北、もう一つは西だな」

「どうします？」

「二手に別れて迎え撃つぞ……俺は北へ向かう」

「了解。じゃあ俺は西へ……ただのルシフェルならチョロい相手だ、この力で瞬殺してやりますよ！」

金髪はそう言いながら左腕を突き出した。左腕には赤い涙滴状の結晶が埋め込まれた、金色のブレスレットが巻かれている。

「はやるな！どんな相手にも……」

「油断は禁物、でしょ。わかってますって」

金髪の言葉に、長髪は思わず苦笑した。

二人は避難所を出ると、二手に別れて走り出す。

綾音はエクスマキナ艦内の医務室で、ベッドに眠る青年、樹ハル力を見詰めていた。

穏やかで、子供のような寝顔である。

「様子はどうなんですか？」

綾音はベッドの傍らのデスクで作業をしている、艦医の大槻邦彦に尋ねた。

「見ての通り、よう眠っとる。並の人間ならとづくに死んどるようなダメージ受けとったんやけど、今は完全に回復しとる。けつたいな子やで」

訛りの強い関西弁で大槻が答える。

「人間……なんでしょうか？」

綾音の問いかけに、大槻は一呼吸おいて口を開いた。

「さつき精密検査してみたんやけどな、この異常な回復力の高さや、巨人に化けるいうことを除けば、普通の人間と全く変わらん。ホンマ、どうなつとんのやろ？」

首を傾げる大槻。内心ほっとしつつ、綾音はデスクの上に置かれたある物に気付いた。

それは、透き通るような緑色をした涙滴状の結晶体だった。

「あの、これは……？」

「ああ、そのボウズがずっと握ってたんや。なんや見た感じ、エメラルドによく似とるなあ」

綾音が結晶体を手にとって見ようとすると、自動ドアが開いて光一が駆け込んで来た。

「副長、隊長が至急CICに集合するようにと」

「何かあったの？」

「熊本と仙台の上空に、ルシフェルの大群が現れました！」

「なんですって!？」

熊本と仙台は、昼間にもルシフェルの襲撃を受けていた。再び襲われれば、今度こそ壊滅してしまう。

綾音は立ち上がると、光一と連れ立って医務室を後にした。

6 .

二人がCICに駆け込むと、一同がメインパネルに映し出される映像を凝視していた。

「空自の戦闘機隊が出撃態勢に入りました、天草と多賀城の高射隊もミサイルの発射準備を整えています」

「無茶だぜ……自衛隊の装備で太刀打ちできる相手かよ」

藤原の言うことももつともだった。

「かと言って何もしない訳にはいかない……彼らの行動を止めることはできない」

真琴の言葉に、皆が沈痛な面持ちになった。

「参謀、ストライカーの出撃許可を！」

佐沼が思い切って口を開く。

「しかし3号機の修理がまだ……」

「残っている1号と2号で当たります」

佐沼が食い下がったその時だった。

「熊本に……巨人が現れました！」

コンピュータのディスプレイを睨んでいた寺沢が叫ぶ。

「仙台上空にも巨人が出現、映像出します！」

寺沢と同じく、本部のオペレーターだったエミリア・ロウがメインパネルへ視線をつなげる。

「こいつら、昼間の……」

藤原が言くと、被せるように真琴は言った。

「これが、名古屋の変異体を倒した巨人達……」

二体の巨人は、夜空から襲ってくるルシフェルの群れを見据えると、

猛然とそれに向かっていった。

「迎え撃つつもりか」

「参謀……」

真琴は意を決したように頷くと、ロメラの面々を見詰めた。

「ロメラ、直ちに出動。状況次第で巨人との共闘も許可します」

「了解！」

ロメラの隊員達はハンガーへ向かう。

数分後、アンリと藤原の乗った1号機は熊本へ、綾音と王の乗った2号機は仙台へ向かってエクスマキナを飛び立った。

阿蘇山の上空。

赤い巨人は両拳を胸の前で突き合わせると、そのまま横一杯に腕を広げた。

すると両拳から、全長数百mはある炎の剣が噴き出す。

そして巨人は、腕を広げたままの体勢で回転を始めた。

回転は勢いを増す。それは高速回転する、直径1km近い炎の輪であった。

輪は猛烈な勢いで上昇すると、周りに群がるラウスを薙ぎ払っていった。

そこへ、ストライカー1号がジョウントで駆け付けて来た。

「Oh, Fantastic!」

操縦席のアンリが感嘆の声を上げた。

ラウスを薙ぎ払い、回転を止めた巨人は、両腕の炎を右拳へと収束させる。

そして巨人は、裸同然となったマザーへ突っ込み、そのコアへ超高熱の炎に包まれた拳を叩き込んだ。

たちまち大爆発をおこすマザー。しかしマザーは他に五体おり、ラウスもまだ百匹以上いる。

巨人はそれらを見据えると再び炎の輪を作り、ラウスを吹き飛ばしていく。



「アンリ、アイツの取り零したラウスを叩くぞ。北米方面航空団工  
士の腕、見せてくれよ！」

藤原に言われ、アンリはサムズアップを試みせた。

「オツケー！」

ストライカー1号はラウスの群れに突っ込んでいく。

巨人はマザーの集まった中心に来ると、名古屋で変異体に使った  
ものとおなじ技を繰り出した。

頭から立ち上る炎の柱を振り回し、それに当たったマザーが次々  
に爆発し、消滅する。爆炎で空が赤く染まり、地上の街を明るく照  
らし出した。

7 .

青い巨人は仙台港の水面すれすれに静止すると、上から球状にな  
って襲ってくるラウスの群れを見据えた。

「ハアアアアーツ……」

巨人が気合いをかけると、足下を中心とした水面が渦を巻き始め、  
巨大な水の壁となって巨人を覆った。

「はっ！」

掛け声とともに、巨人が両手を開いて腕を天に突き上げる。

壁は無数の小さな水玉へと分解し、機関銃の弾丸のように上空の  
ラウス目掛けて放射された。

水玉に当たったラウスは、微粒子となって次々に消滅する。

ジョウントが終わり、2号機に乗る綾音と王は目の前に広がる幻  
想的な光景に息を飲んだ。

空へ向かって噴き出す無数の水玉。

いわばそれは、水玉の対空砲火であった。

2号機は巨人の周りをゆっくりと旋回する。

一瞬、操縦席の綾音は巨人と目が合ったように感じた。

「……………」

綾音が巨人に見入ったその時、突然警報がなった。

「ああっ、副長！4時の方向からラウスが迫って来てるです！」  
レーザーサイトを睨む王が叫ぶ。

「しまった！」

2号機は1号機ほどの機動性を持ち合わせてはいなかった。

綾音は急いで上昇して振り切ろうとするが、ラウスは食い下がってくる。

すると、巨人は攻撃をやめて飛び上がると2号機に迫るラウスに對して、変異体の足を切断した水蒸気の刃を放った。

これが牽制になったらしく、ラウス達は四方に散った。

「私達を助けてくれた？」

巨人はそのまま一直線に上昇し、同じく変異体に使用した光線弾を胸の前に生成する。

「あいやあ、またあの技だよ……」

巨人は上空のマザーを睨む。そして光線弾を右手に持ち、円盤投げのように回転するとマザーのコアを目掛け、それを勢いよく投げつけた。

光線弾はコアに命中する。一瞬で凍りつき、砕け散るマザー。

綾音と王は、巨人の力にただ圧倒されていた。

8 .

目が覚めると、見知らぬ天井がそこにあつた。

ハルカは身体を起こす。

「おっ！」

口髭を生やし、白衣を着た30代後半位の男がハルカを見てすっとんきような声を上げ、デスク上の電話に手を伸ばす。

「参謀、彼が……目え覚ましよりました」

「あの、ここは？」

「木更津の沖合い。アークの潜水艦、エクスマキナの中や。あ、

俺は艦医の大槻いうモンや」

「潜水艦で……基地は？」

「極東本部は壊滅したで。もっとも本部を潰したルシフェルは、君がシバキ倒してくれたようやけど……あ、そうそう」

大槻はデスクの上に置いてあった緑の結晶体をハルカへ手渡した。

「これは？」

「なんや、分からののか？自分、ずうつと握ってたんやで」

大槻が言い終わると同時に、医務室の自動ドアが開いた。

小銃を構えた警備隊員を先頭に、アーク幹部の制服に身を包んだ女性に率いられた隊員達が雪崩れ込んでくる。

「え、今度は何？」

小銃を突き付けられ、ハルカは悲痛な声を上げながら両手を上げた。

「目を覚ましたんですか？」

綾音は松島港の一角に着陸させた2号機の操縦席に座り、ディスプレイに映し出された佐沼と通信を行っていた。

「ああ。話も一通り聞くことができたよ。どうやら彼は、仕事帰りに諜報部の人間に拉致され、本部の地下に監禁されていたらしい。本人には拉致される覚えがないそうだが……」

佐沼の表情が曇る。

「諜報部が！？」

「恐らく……樹ハルカがあの人々の正体であることを、上層部は把握していたのかも知れん」

「そうですか……これから、彼をどうしますか？」

「こうなった以上、帰すわけにもいかんしな……とりあえずはこのまま、我々の下に居てもらうことになった。事情を話したら、アイツも納得してくれたよ」

「そうですか」

綾音はほっと息をついた。

「そつちはどうだ、何か掴めたか？」

「いえ、それらしい人間はまだ……」

仙台港でルシフェルを殲滅した青い巨人は、全てが終わるとその場を飛び立っていった。

2号機はすぐに後を追ったが、巨人は松島湾の上空で姿を消した。

ハルカのように、人間が変身している可能性があったため、綾音と王は松島周辺を搜索していたのだった。

同じようにアンリと藤原も、阿蘇山の火口付近で姿を消した赤い巨人の行方を追っていた。

「疲れている所悪いが、このまま搜索を続行してくれ。何かあったら逐一連絡するように」

「了解」

通信を終え、綾音はキャノピーを開けて機体を降りる。

早朝の海岸には濃い霧がかかり、潮風が肌寒くさえ感じる。

王は搜索に出たまま、まだ戻っていない。

綾音は周りを見回した。人気はない。そう思った時、彼女の視界に人影が飛び込んだ。

「……！」

視線の先、100m程離れた栈橋の上に一人の男が立ち、こちらを見詰めている。

男は背が高く、髪を長く伸ばしていた。

男は2号機をじつと見詰めている。どうやら綾音の姿は見えていないらしい。

不意に男は背を向けると、栈橋を渡って丘へ戻り、そのまま街の方向へ向かった。

「あの男は……」

男の後ろ姿が、なぜか懐かしく感じられた。高い身長。細いがしっかりとした背中。

「まさか……」

気が付いた時、綾音は男を追って駆け出していた。

松島の名刹・瑞巖寺。人気のない杉木立の中を、綾音はさ迷っていた。

男が瑞巖寺の境内に入った所までは確認できたものの、そこで見失ってしまった。

「一体、どこへ……」

綾音はもう一度、辺りを見回した。

やはり見当たらない。胸に手をやると、心臓がまだ強い鼓動を打っている。

（何なんだろう、この胸騒ぎは……彼が生きているはずがないのに）

「俺をつけて来たのか？」

突然、背中から声が聞こえた。綾音は驚いて振り向く。

そこには、綾音の追っていた長髪の男が立っていた。

「！」

その男の顔に、綾音は我を失ってしまった。時が止まる。

2人の間を、一陣の風が吹き抜けた。

綾音は男を凝視したまま、一步後ずさった。

「驚かせてすまん……まだアークにいたんだな」

男の、どこか憂いを帯びた笑顔。髪型こそ変わってはいるが、他は以前と少しも変わらない。

やっとの事で、綾音は口を開いた。

「天宮……海」

綾音に名を呼ばれ、長髪の男、天宮海はゆっくりと頷いた。

「久しぶりだな……綾音」

「海、あなたどうして？」

「話すと、長くなるんだが……ん!?」

途中まで言いかけ、海は唐突に空を見上げた。

「どうしたの？」

「……来る！」

同じ頃、エクスマキナのCICは騒然となっていた。

「大気圏外より、巨大な物体が降下中、間もなく成層圏に入ります！」

寺沢が報告する。

「リーダーによる観測データでは、物体は巨大な円盤状、その直径およそ……え、何だよこれ!？」

観測長の檜山が言葉に詰まる。

「どうしたの？」

真琴の問いかけに、檜山はやつとの事で答えた。

「円盤の直径、およそ10km！」

「10キロ……」

CICにいた一同は愕然となった。

「メインパネルに映像出します」

エミリアがメインパネルのスイッチを入れる。

そこに映っていたのは、平べったクリーム色の巨大な円盤だった。質感から、それが生物であることが画面越しにもわかる。

その円盤の中心部から、人間の上半身のようなものが生えている。高さにして2〜300m位、六本の腕が生え、真っ赤な目に口が耳まで裂けた凶悪そうな顔。

まるで阿修羅のような姿であった。

「変異体！」

佐沼が画面を見詰めて口を開く。

「なぜ今まで見つからなかったんだ？」

ロジンスキーが悔しそうに言う。とドアが開き、本部の科学スタッフだった夏目雅人が駆け込んできた。

「参謀、分析結果が出ました。あの変異体の体組織は、あらゆる光電波を透過する性質を持っています」

「だから今まで見つからなかったのね……待って、ではどうして今になって姿を？」

「それが、電離層を通る過程で身体の分子構造が変化し、姿を現したかと」

「なんてヤツだ……我々の想像を超えている」

佐沼が力なく言うと、それにかぶせるように寺沢が叫んだ。

「参謀、変異体の降下予測地点、東京湾一帯です！」

10 .

「東京湾上空に変異体が！」

佐沼から通信を受けた藤原が絶句する。

「ひょつとして、昨夜の流星雨ってマサカ……」

「恐らく、ヤツに破壊されて落下した、通信衛星の破片だ」

断言した佐沼の言葉に、二人は返す言葉もなかった。

「アンリ、藤原、巨人の搜索を中断して至急戻ってくれ！」

「了解！」

アンリと藤原がストライカーへ戻ろうと走り出したその時だった。阿蘇の火口から、突然赤い光が噴き上がり、その中から赤い巨人が空へ飛び出して行った。

「アイツ、変異体に向かうつもり？」

「アンリ、アイツを追うぞ！」

アンリが頷き、二人はストライカーへ乗り込んだ。

「なあオツちゃん、なにが起こってんの？」

ベッドの上に座っていたハルカが大概に尋ねた。

「どうやら変異体が、この船の真上に降りて来るとるみたいや……」

「……」

「マジかよ、それってヤバイじゃん。あの戦闘機だつてまだ修理中なんだから？」

そう言つて、ハルカは一瞬下を向いたが、すぐに顔を上げて立ち上がった。

「どないした？」

「俺が………迎え撃つ！」

ハルカは廊下へ走り出た。

「おい、待たんかい！」

「………なんですつて!？」

医務室からかかつてきた電話に、真琴は啞然となった。

「どうしたんですか？」

光一が問いかける。

「樹ハルカが、医務室を脱走して甲板へ向かったそうよ」

「あいつ、また巨人になるうつつてのか？」

佐沼がそう言ったのを聞き、光一は廊下へと飛び出した。

「クソ！外へはどの道を行けば………」

ハルカが通路を右往左往していると、廊下の角から光一が姿を現した。

「あ、お前………」

「勝手な行動をとるな！医務室へ戻れ！」

「は!？何言つてんだよ、そんなこと言つてる場合………」

ハルカがそこまで言いかけると、光一は腰のホルスターから拳銃を抜いて突きつけた。

「そこを動くな………この化け物め！」

動きが固まったハルカへ、光一は冷たく言い放った。

「変異体が来てる、それも凄くでかいヤツが………陽介も向かったな」



瑞巖寺の境内で、海は押し殺した声で言った。

「ようすけ……神山君も生きてるの？」

海は無言で頷くと、再び空を見上げる。

「行かないと……全くと、休む暇も与えてくれないか」

「海！あなた一体どうしたというの？」

海は綾音の顔をまじまじと見詰めた。

「……綾音、あの時は約束を守れなかったが、今の俺にはそれを果たせるだけの力がある！」

海の言葉の意味が分からず、綾音は当惑する。

「どういうこと？」

「下がってる……」

海に言われるがまま、綾音は後ずさった。

海はかすかに微笑むと、来ていたコートの懐からスティック状のアイテムを取り出す。

アイテムの先端には、涙滴状の青い結晶体が埋め込まれていた。

「それは？」

「これが、俺の力だ」

そう言うと、海は右手に持ったアイテムを空へ掲げる。

次の瞬間、結晶体が真っ青な光を放った。

海はその光に包まれ、青い巨人へと姿を変えた。

「そんな……海、あなたが！」

綾音は目の前に聳え立つ巨人を、ただ呆然と見詰めるのだった。

1 .

変異体は上空5000mに静止した。

変異体の円盤上になった下半身が発光し、稲妻のような光線が海面へ向かって放射される。

その数は数百本に及び、光線は海面だけでなく、沿岸の街にも降り注いだ。

すると、巨大なビルや鉄塔、自動車、人間、そこにあるありとあらゆるものが空中へと舞い上り、塵のように砕け散っていく。

それは一種の反重力光線だった。

そして光線の降り注いだ海面は大きく渦を巻く。だがそれは通常とは逆に、外側へ向かって力を放出していた。

たちまち大波が起こり、沿岸の町とエクスマキナに襲い掛かる。

「マジかよ……」

ハルカは光一を睨み付けるが、光一は微動だにしない。

「言っとおりにしないと、本当に撃つぞ！」

光一が語気を強めたその時、激しい物音と共に船体が大きく揺れた。

姿勢を崩す光一。その隙を突き、ハルカは光一の脇をすり抜けて走り出た。

「……ま、待て！」

動転した光一は、ハルカに向かって反射的に引き金を引いていた。狭い通路に銃声が響く。

その刹那だった。

突然、通路内を一陣の風が吹き抜けたかと思うと、それがとっさ

に顔をかばっていたハルカの右手の前に集約されて渦を巻き、風の障壁を作り出したのだ。

渦を巻く障壁は弾丸のスピードを相殺し、弾丸はハルカの眼前で床に落ちた。

時間にして一秒にも満たない、一瞬の出来事である。

「!?!」

ハルカは反射的に右手を突き出す。

すると渦巻いていた風は向きを変え、光一へ襲いかかった。

それは風と言うよりは衝撃波に近かった。

10m近く吹き飛ばされた光一は床に頭を強打し、その場に失神してしまった。

自分の右手を見詰めて動揺するハルカだったが、考えている暇はない。

「ワリい……」

光一に両手を合わせ、その場を後に走り出すハルカだった。

(海……一体なぜ?)

ストライカー2号のコクピット。その後部座席に座った綾音は何度も同じ問いかけを繰り返す。

松島を飛び立った青い巨人を追って、2号機は東京湾へ向かって飛んでいた。

関東上空にかかった厚い雲の中を飛んでいるため、視界が効かない。

昨日からの戦闘でジェネレーター内のウルトラ粒子の供給が追いつかず、ジョウントができる状態ではなかった。

しかし、それでもマツハ3の速度で飛んでいるため、あと数分で変異体へ到達できる計算だった。

「副長、間もなく雲を抜けます。恐らくそこに変異体も」

操縦席の王がそういうと、リーダーに反応が現れた。

黒かったリーダーサイトが無数の緑色の点で埋め尽くされる。

それはラウスの存在を示す点であった。その数、千以上。

「なんて数なの……」

綾音が絶句したその時、2号機が雲を抜けた。

「おおっ！？なんと……」

目の前に現れた変異体の姿に、王が目を丸くする。

「大き過ぎる……」

空に滞空する変異体。その周囲を無数のラウスが飛び回っている。そしてラウスを相手に、赤い巨人と青い巨人が戦っていた。

「ああ、アイツらまた……」

「あの変異体……コアが三つある」

ディスプレイを睨んでいた綾音は、視線を上げて変異体を見つめた。

ディスプレイのスクヤニング画像には、変異体の円盤部の端に光る赤い球体が映し出されていた。

三つのコアは丁度正三角形を描くように位置し、巨人達はそれを潰すために二手に分かれていたのだ。

「エクスマキナと通信できる？」

「ダメです。変異体の放射する光線のせいで、海上からの電波は全て遮断されています」

「クツ……」

「副長、どうします……」

通信ができない以上、この場の指揮は自分が執るしかない。だが綾音は迷った。

当然攻撃すべきであるが、残ったコアを潰そうにも、それを守るラウスが多すぎて2号機だけでは危険すぎたのだ。

綾音が言葉に詰まったその時、通信機へアンリの声が入った。

「Sorry、副長。遅くなりマシタ！」

見上げると、上空に1号機の姿がある。

綾音の目が輝いた。二機なら何とかなる。

「アンリ、藤原君、この変異体はコアを三つ持っている。今巨人達

が二つのコアへ向かっているから、私達は残った三つ目のコアを潰すわよ！」

矢継ぎ早に説明する綾音に戸惑いながら、アンリと藤原は口を開いた。

「……………了解！」

二機のストライカーは、変異体の三つ目のコアへ向かって突撃した。

2 .

やっとのことで甲板に出て空を見上げると、上空の変異体の為に太陽光は遮られ、空は見渡す限り白い円盤状の体に覆われていた。

「デカすぎだろ……………」

ハルカがそう呟くと、変異体は体を発光させ、再び反重力光線を放射した。

光線が海面に降り注ぎ、それによって起きた大波がエクスマキナを包む。

大きく揺れる船体。手すりに掴まり、振り落とされそうになりながら、ハルカはあることに気付いた。

（待てよ。勢いでここまで来たけど、一体どうすりゃ巨人になれるんだ？）

途方に暮れ、変異体を見詰めるハルカ。

その時、ハルカはズボンのポケットから緑色の光が溢れ出ていることに気付いた。

驚いてポケットに手をやると、中に硬いものが入っている。

出してみるとそれは、大槻から渡された緑色の結晶体だった。

「これは……………」

それを手に、強く願えば、あなたは変わる

あの少女が目の前に立っていた。

「お前……」

ハルカが語りかけようとすると、再び大波が起こって船体が揺らいた。

「クソっ……」

姿勢を崩したハルカが顔を上げた時、そこに少女の姿はなかった。

「これを手に、強く願えば……」

ずぶ濡れになったハルカは、結晶体を強く握り締めた。

（もう一度……あの力を……！）

結晶体は更に輝きを増す。やがてその光はハルカを包み込んだ。

体の中に風が渦巻き、全身に力のみなぎるのが分かる。

「オオオオオオーツ！」

叫びとともに突風が吹き抜け、ハルカは緑色の光へと変わる。

揺れるCICに、檜山の声が響く。

「上部甲板に、強力なウルトラ粒子反応！」

「そんな…… ジェネレータなしでどうやって!？」

報告を聞いた真琴は絶句した。

そもそも、ウルトラ粒子は自然界に存在しない。

領域と呼ばれる、この世界とは異なる物理法則を持つ特殊位相でニュートリノを高濃度に圧縮し、合成・変換するプロセスを経なければ得られないのだ。

この領域を人工的に作り出し、ウルトラ粒子を生成できるのは、現状では ジェネレータ以外にはない。

そのため真琴は、檜山の報告をすぐに信じる事ができなかった。

「映像出しマス」

エミリアが回線をつないだメインパネルには、甲板から空へ向かって噴き上がる、緑色の光が映し出されていた。

一同が食い入るようにパネルを見詰めていると、光は巨人へと姿を変える。

銀色の体に走る緑色のライン。

胸から肩を守る、逆三角形の大きな装甲。

無機質ながら、どこか優しさを感じさせる顔と頭部を守る、額から頭頂へ一本の突起が走る緑色のヘッドギア。

そしてヘッドギアの切れ目から、流れるように伸びる長い銀髪。

全長約40mの巨人が今、大空を塞ぐ変異体へ向かって勢いよく飛び立つ。

「巨人……あれが樹ハルカなのか」

自身にとっては初めて見ることになる、再び巨人へと変身したハルカを前に、佐沼は呟いた。

3 .

赤と青の巨人、そして二機のストライカーは、お互いの姿が見えない程に離れ、ラウスの大群と戦っていた。

しかし、ラウスの数が多すぎ、コアに近付くことが出来ない。

「だああ！うぜえんだよ、このハ工共！」

藤原が声を荒げ、光子ブラスターを乱射したその時だった。

突然、変異体の下半身を突き破って緑の巨人が飛び出して来た。

「あいやあ、あれは……」

王の目が丸を通り越して点になる。

「ハルカ……」

ロメラの四人、そして二体の巨人の視線がハルカへと注がれる。

(あいつらも……俺と同じ……)

巨人達に気づいたハルカは、二体を見つめる。三者は空中で対峙する格好になった。

と、その時だった。

変異体の体に空いた穴の組織が再生され、元通りに塞がったの

だ。

(こいつ、不死身かよ！)

コアに視線を移したハルカがそう思った瞬間、脳裏に突然聞き覚えのない声が響いた。

(おい、お前)

それは一種のテレパシーのようであった。

声の主を探して周りを見回すと、青い巨人は自分を見つめたまま微動だにしないのに対し、赤い巨人が自分を指差していた。

(あんたか？俺を呼んだのは)

赤い巨人は大きく頷く。

なぜか自分にもテレパシーが使えることに驚きつつ、ハルカは赤い巨人を見つめた。

(言葉は通じるようだな……いいか、俺等に味方するつもりなら、あのコアを潰してくれ！)

赤い巨人は、ストライカーが当たっているコアを指し示す。

(え……ちよつと待てよ、あんたは一体？)

(のんびり話してる暇はねえ！やるのか、やらないのか、どっちだ！)

(……やる！)

ハルカは赤い巨人に向かって頷いた。

コアへ向かって刃を顔の前へ突き出し、勢いよく飛ぶハルカ。

身体が緑色の光のフィールドに覆われ、フィールドにぶつかったラウスが次々に消滅する。

コアに到達したハルカは、そこへ刃を力いっぱい振り下ろした。寸断されるコア。

ハルカを睨み付けた変異体が怒り狂ったように吠える。

「やったぜ！」

藤原が喜びの声を上げる。が、しかし……。

コアの周りに赤い光が注ぎ込まれ、寸断されたコアが元通りに復元してしまった。



「おい、どうなってんだよ!?」

「コアが……」

藤原が素っ頓狂な声をあげ、アンリが絶句する。

変異体はさらに怒って、円盤から無数のラウスが飛び出してハル力達に襲い掛かった。

形成が逆転して巨人達は防戦一方となり、ストライカーも左右に散った。

4 .

「分析できたわ。あの変異体は体内に特殊な生体エネルギーを放射して、コアや体組織を分子レベルで再生させてしまうのよ」

ラウスに追われて飛び回る2号機のコクピット内で、綾音は叫んだ。

「それはどつから放射されてるんです？」

同じく逃げ回る1号機の、藤原からの通信に綾音は答えた。

「円盤中心部、ヤツの頭部からよ！」

ロメラの一同の目が、変異体の上半身へ向いた。縦横無尽に動き回るラウス達が上半身をドーム状に覆い、それが幾重にも層を作っている。

「よし、それならヤツの頭を叩くまで！」

藤原の言葉を受け、アンリは機首を変異体へ向ける。だが……

「クソ、ラウスの壁が厚すぎて、頭をロックオンできねえ！」

何百匹というラウスが高速で飛び回り、視界を遮っているためにミサイルのターゲットロックが機能せず、藤原は悲痛な声をあげた。

「だったらあの中にダイヴして、光子ブラスターで……」

息巻くアンリだったが、綾音からの通信がそれを制した。

「無理よ、例えばストライカーの装甲でも、突入すれば頭部へ近づく前にすり潰されるわ！」

「……………」

手も足も出ず、一同が黙りかけたその時、王が唐突に口を開いた。

「そつだ、いい考えあります！」

「何なの？」

王は得意げに答えた。

「2号機がシルエツトブランチでラウスの注意を反らし、隙を突いて1号機がアクセルフライトで攻撃、どうです？」

「それならチェンバーに残った粒子でやれる、それでいきましょう！」

綾音の号令で、ストライカーはラウスの壁へ向かった。そして2号機はラウスの壁に近づくと、その周りを旋回する。

「ナノマシンカートリッジ、ジェネレータへの接続完了」

そう言った綾音に頷き、王は起動レバーに手をかけた。

「ジェネレータ起動。シルエツトブランチ！」

王がレバーを引くと、ジェネレータから金色のウルトラ粒子が噴出し、2号機の飛んだ軌跡に機体の残像をいくつも作り出した。

しかしその残像は消えず、あるうことかバラバラに飛び回り始めたのだ。

それはウルトラ粒子を素にナノマシンが形成する、いわば自律的に動く分身であった。

その分身に翻弄され、壁を作っていたラウスは四方へ散る。

ラウスが襲い掛かった分身はすぐに消えたが、上半身を守っていた壁は完全に崩れた。

「アンリ、今だ！」

藤原が叫ぶ。

「ジェネレータ起動。アクセルフライト！」

アクセルフライト。それは光速を超えるタキオンと同質の存在、ウルトラ粒子の特性を利用した超高速移動である。

アンリがキーを押すと、機内に「Start」という電子音声の流れで1号機が粒子に包まれ、時間が止まった。

正確に言えば、1号機以外の時間の流れが1/1000に減速されたのだ。

壁を作っていたラウス達が空中に静止して羽をゆっくり上下させている。その空いた隙間に、1号機は突入した。

ラウスは動いていないに等しいため、1号機はあつというまに変異体の頭部へ迫った。

変異体は口を開いたまま硬直している。

「こんなにハエにたかられちゃって……お前、ちゃんと風呂入ってんのか？」

藤原は皮肉っぽく言いながら、口内をロックオンした。

「その大口、閉じるんじゃねえぞ……サラマンダー、ファイア！」

ウルトラ粒子を纏った対変異体用ミサイル「サラマンダー」が、変異体の口目掛けて発射される。

「不潔な人は、キライ！」

アンリはすぐに1号機を急上昇させ、高空へ離脱した。

サラマンダーは変異体の口内で爆発し、頭が粉々に吹き飛ばす。そして

「Over」という電子音声とともに、時間の流れが元に戻った。

綾音やハルカ達から見れば、1号機は通常の1000倍のスピードで動いた為、変異体の頭部が一瞬で破裂したように見えた。

時間にして、わずか1秒足らずの出来事である。

頭部を失った変異体は六本の腕をプルプルと震わせ、そのまま動かなくなった。

5 .

「エネルギーの放射が消えた！」

だが一同が喜んだのも束の間だった。

中枢を失った変異体は、そのまま猛烈な勢いで落下を始めたのだ。

「今コアを潰せば、コイツは消滅するはず……」  
綾音は青い巨人を見つめた。

「王隊員……2号機を青い巨人の側に静止させて」

「え！？そんな、危険です！」

「彼は味方よ……急いで！」

有無を言わせぬ綾音の口調に押され、王は2号機を青い巨人へ向かわせた。

ダクテッドファンを垂直に向け、青い巨人の眼前にホバリングで滞空する2号機。

(海……)

綾音は巨人の目をじっと見つめ、視線を送る。

巨人が気づいたのを確認すると、綾音は右手を上げて手信号を送った。

手信号を見た巨人は大きく頷き、2号機の頭上を飛んでいく。

そして青い巨人は赤い巨人に近寄ると、コアの場所を指し示した。赤い巨人は了解したように頷くとハルカへ視線を送る。

一瞬で全てを察したハルカも頷き、三体はそれぞれコアへ向かって飛んだ。

赤い巨人は右の拳から炎のように真っ赤な光を発し、青い巨人は右足を青白く発光させる。

そしてハルカは右腕全体を発光させて200m近い長さの光の刃を作り出した。

綾音が目の前の光景に圧倒されたその時、レーダーサイトに、高レベルのウルトラ粒子反応が映し出された。

その発生ポイントはハルカ達の位置と合致している。

「何なの、この粒子反応は……まさかあの光が!？」

綾音は食い入るように、ハルカ達を見つめた。

「おおおおおーっ!!!」

同時に叫ぶ巨人達。

赤い巨人はストリートパンチをコアへ叩き込んで炎上させ、青い

巨人は高高度から勢いよくキックを見舞ってコアを瞬時に氷結させ、粉砕する。

ハルカは光の長刀を大きく振るい、コアを斬り裂いた。

変異体は落下しながら、微粒子となって消滅する。同時に、千匹以上いたラウスも全て消滅した。

「変異体、消滅を確認」

「海流も元に戻りつつあります」

オペレーター達の報告を聞き、真琴は胸を撫で下ろした。

「うまくいったようね・・・」

「ストライカーとの通信、回復しました。映像出しマス」

エミリアがメインパネルへ、ストライカーから送られてくる映像をつなぐ。

そこには、直立の姿勢で滞空する、三体の巨人の姿が映し出されていた。

「あいつら・・・」

佐沼がパネルを凝視する。三体の巨人の、胸にある水晶体が赤く点滅を始めた。

「何なの？あの点滅は・・・」

真琴がそうつぶやいた時、自動ドアが開き、光一がたどたどしい足取りでCICに駆け込んできた。

「志田、お前・・・」

「い、樹はどうしました？」

佐沼は驚きながらパネルを指差す。巨人達の姿を見た光一は、そのまま力なく床へ座り込んだ。

6 .

綾音は彼方に見える、青い巨人を見た。青い巨人は数キロ先にいるハルカを睨みつけるように凝視している。

アンリは1号機をハルカの前に滞空させると、ハルカに向かってサムズアップをしてみせた。

それに答えるように、ハルカも1号機に向かってサムズアップをする。

アンリと藤原、そして2号機の王は満面の笑みを浮かべた。

するとそこへ、赤い巨人が飛んで来てハルカに近寄った。

「副長……」

「大丈夫、向こうに敵対する意志はないわ」

不安がる王をなだめるように、綾音は言った。

ハルカは赤い巨人と向き合う。ひどく身体が重い。

（お前、なかなかやるじゃん）

テレパシーで語りかける赤い巨人。こちらも消耗が激しい様子だった。

（……あんた達も、やっぱり人間なのか？）

聞き返すハルカに、赤い巨人は頷いてみせた。

（ああ、どういう訳か、気がついたらこんな力が……）

そう言って赤い巨人は、後方の青い巨人へ振り向いた。

肩で息をしながら、ハルカを睨みつけていた青い巨人は、二人に背を向けて飛び去って行く。

（あれ……どうしたんだろ？悪いな、行かなきゃだ）

赤い巨人は青い巨人を追ってその場を飛び立つ姿勢をとりながら、ハルカを振り返った。

（ところでお前、名前はなんていうんだ？俺は神山陽介）

（樹ハルカ……）

（ハルカ？女みたいな名前だな）

（よく言われるよ）

（これからもちよくちよく顔を合わせる事になりそうだ、じやあな。綾音さんによるしく！）

そう言つと、神山陽介と名乗った赤い巨人は飛び去っていく。

一同は、遠ざかる二体の背中を見詰め続けた。

「パラキュリアを撃破するとは……アークの新型機が来なければ、一気に始末できたものを」

薄暗い部屋の奥に設置された、大型スクリーンを見つめる白髪の男性が悔しそうに口を開いた。

そこは、広い会議室だった。中央に置かれた楕円形のテーブルを挟んで、十人のスーツ姿の男女が向かい合って座っている。

年齢層は壮年〜初老といったところであろうか。彼等の視線は、やはり大型スクリーンに注がれている。

スクリーンには、さっきまで巨人達と変異体との戦いの様子が映し出されていた。

「全く想定外だったよ。あの赤と青の巨人、そして極東本部の生き残り……」

「これでユニゲルン、ダリエル、そしてグノーを含めれば四体の損失か……」

「しかし、実験は成功よ。これで当面の目標は達成できたわ」  
おかつば頭の老女の言葉に、皆は同意するように頷いた。

そして彼らはさらに会話を続ける。

「青柳……彼は優秀な司令官だったが、身の程を知らなかったな……」

「まあ、飼い犬に手を噛まれるというが、あの犬は歯を抜かれていたことにも気付かずに噛み付いた、考えようによっては哀れでもあるよ」

「それを言えば、昌輝のヤツもだ。恩を忘れて我らを裏切るつなど、思い上がりが過ぎた……」

「それで、あの不確定要素はどうするの？」

「聞くまでもない、奴らは我々にとって邪魔でしかないんだ。いずれ排除するさ、樹の悴もろとも……」

「その通り。人類の敵は人類自身の手で倒してこそ意味がある」

その言葉に、一同は申し合わせていたかのごとく、不敵な笑みを

浮かべたのだった。

7 .

ハルカはエクスマキナへ向かって、ゆっくりと降下した。

カタパルトデッキが開放され、先に戻ったストライカーが収容されていくのが見える。

ハルカの身体は光の粒子へと分解し、ストライカーに続く形でデッキへ降り注いだ。

そして粒子は凝縮し、人間の姿へと変わった。

人間に戻ったハルカは、デッキ内を見回す。

熊坂以下、整備班の面々の視線がハルカへ注がれた。

皆の表情は複雑そうであった。無理もない。

艦の危機を救ったのは紛れもなくハルカである。

しかし目の前の光景は、ハルカが普通の人間でないことを実感させる。

皆の心の中で、盛大に祝福したい反面、どうしてもハルカを化け物のように見てしまう所があり、手放しで迎え入れることをためらってしまう。

そんな気まずい空気を破ったのはアンリだった。

「Hey, you! 最高にcoolだったヨ!」

底抜けに明るい声を張り上げてハルカへ駆け寄ると、臆することなくその胸に飛び込んで強く抱きしめる。

「ええ!? あ、あの・・・ちよつと・・・!」

突然の事にハルカは当惑してしまった。

その様子に場の空気も緩み、直ぐに笑い声と称賛の言葉がデッキを包みこんだ。

藤原と王、綾音もハルカへ駆け寄った。

「やるじゃねえか、おい! マジ、サンキューな!」

「謝々、謝々!」



藤原と王がハルカの肩を叩く。笑いながら痛がるハルカ。と、その時、ハルカは自分の目の前に立つ綾音に気付いた。

「あ……」

「これで三度、あなたには助けられたわね」

「三度……じゃあ、あの戦闘機に乗ってたのってやっぱり……」

綾音はゆつくりと頷いた。

「自己紹介が遅れたけど……」

そこまで言うと、綾音は姿勢を正して敬礼をする。

「アーク・統合作戦部付特務隊　ロメラ　副長、梶綾音です」

「綾音、さん……」

綾音は、ハルカへ右手を差し出して言った。

「ありがとう」

「……」

ハルカは少し間を置いて頷くと、笑顔でそれに応え、二人は互いの手を強く握り合った。

変異体の光線放射によつて、東京湾沿岸の都市は多大な被害を被っていた。

エクスマキナの一同も、消防と自衛隊に協力し、救助活動に参加していた。

ここで、ストライカーの性能がモノを言う。

火災が起こっている地域には、修理の終わった3号機がジョウントで駆けつけ、搭載した大量の消火弾を発射して瞬時に鎮火し、火災の被害を最小限に食い止めた。

元々ジャイロ機として設計されていた2号機は、ヘリコプターを上回る複雑な空中動作が可能だったため、救助現場で重宝がられた。特殊ミッション用の様々なオプションパーツを装備できたことや、高度な情報集積・分析・解析機能を備えていたことも幸いし、2号機は目を見張る活躍をみせていたのである。

エクスマキナ自体も、救援物資や被災した人々の輸送に一役買っていた。一同は寝る間もなく、救助活動に忙殺されたのだった。なお、空中での高速戦闘のみに特化されていた1号機は、格納庫に収まったまま出番を迎えることがなかった。

そして数日が過ぎたある日。救助活動も一段落し、最後の被災者の一団を乗せ、エクスマキナは川崎港へ向かっていた。

帰艦した綾音が、一息入れようと食堂に向かっていると、開きスペースになっていく部屋から子供達の歓声が聞こえた。

何事かと思い覗き込んでみると、ハルカとアンリが被災者の子供達と遊んでいる。楽しげな様子に心が和み、疲労で硬くなっていた表情も思わず綻んだ。

「あの人、幼稚園の先生だそうですね」

部屋の入り口に立っていた女性が話しかけてきた。服装からして被災者の一人である。

「助かりました。うちの子、ずっと泣いてばかりだったから……」

そういつて女性は部屋の中を見やる。あの中に彼女の子供もいるらしかった。

「みんな、楽しそうですね」

綾音はそう言っ、ハルカを見つめた。アンリは完全に彼と打ち解けている。アンリに限らず、艦のクルー達は光一を除き、皆、ハルカに好意的だった。

ハルカは子供達を、いや、人を惹き付ける何かを自然の内に身に付けている。

そんな風に、綾音は感じた。

8 .

あれからルシフェルは現れていない。

事態は沈静化しつつあったが、アークの中枢たる極東本部は壊滅し、統制を失った各国の支部はバラバラに行動している状態であった。

先の見えない不安が世界を覆い、それを反映しているかのような曇り空が広がっている。

木更津港の一角。人気のないその区画に、焚き火をしている二人の青年がいた。

「しかし、不気味な位静かツスね、海さん」

火に薪代わりの廃材をくべながら、金髪の青年が傍に立つ長髪の男に言った。しかし、反応がない。

「海さん！」

「ん？ああ、すまん」

我に返ったように、長髪の男、天宮海はうつむいたまま言った。

「もう、どうしたんスか？この前からずっとそんな感ですよ、綾音さんにも会えたってのになんで……」

「なあ陽介、あの緑のヤツ、一体何者なんだろうな」

海の問い掛けに、金髪の青年、神山陽介は少し考え込んで口を開く。

「同類頂ってヤツでしょ、多分。俺達と同じ……」

「ヤツも一回死んで、半年間眠って、生き返ったのか？だとしたら何のために……」

「ルシフェルと戦う為ですよ、絶対。誰がこの力を与えてくれたのかはわからないけど、今は戦うだけっスよ！」

「……フツ、お前らしいな」

少し気が楽になり、海は顔を上げた。

その視線の先には更地同然となった極東本部の敷地が広がり、さらにその先には鉛色の海原が広がっていた。

その海原を、エクスマキナは航行中であった。

今は国連に置かれた最高評議会の命令を待つ状態だが、いつまでも海上を漂っているわけにもいかなかった。

そこで、アークと日本政府との間に結ばれていた協定に基づき、補給もかねて横須賀の海上自衛隊基地へ向かうことになったのだ。そしてブリーフィングルームには、ロメラとクルー達が集まり、夏目によるこれまでの分析結果の報告を聞いていた。

スクリーンに、赤と青の巨人達と戦ったクラゲ型の変異体が映し出されている。

「名古屋を襲った変異体第2号、コードネーム ユニゲルン」  
切り替わって、ハルカと交戦した変異体へ。

これらの映像は全て、ストライカーのカメラに収められていたものである。

「極東本部を壊滅させた第3号、コードネーム ダリエル」

ちなみに変異体につけるコードネームは、コンピュータによってランダムに導き出される。

「そして第4号、コードネーム パラキュリア」

あの異常な大きさを持つ変異体が映し出された後、かつてB小隊を全滅させた変異体が映し出された。

「第1号 グノー がマザーの変異体だったのに対して、この三体は形質も特徴もバラバラ、コアを持つという以外は全く別の生物と言えます」

一同は四体が映し出されたスクリーンを凝視する。

「そして変異体に呼応するように現れた三体の巨人達」

夏目は続ける。

「水の属性を持つ青い巨人、コードネーム アビス。炎の属性を持つ赤い巨人、コードネーム フレア」

「アビスとフレア……」

綾音は、自分に言い聞かせるように呟いた。

「そして樹君の変身した緑の巨人。風の属性を持つと判断できますが彼のデータだけ、なぜかコンピュータが受け付けてくれなくて」

「おかしいわね。やはり上層部が彼のことを把握していて、情報をロククしている……」

真琴は腕を組んで考え込む。

「けどハルカだって分かってるんだし、コードネームなんていらないんじゃないデスか？」

アンリが屈託のない顔で言った。

一瞬、その場が静まったが、直ぐに「それもそうだな」と皆が口々に言い始め、緑の巨人はそのまま「ハルカ」と呼ばれることになった。

「この三体、体色に若干の違いはありますが、同種の存在であると言えます」

夏目は右手に持ったレーザーポインターで三体の胸を指し示す。

「共通点として挙げられるのが、この胸の結晶体。樹君の話から、これは一種のエネルギーゲージかと思われます」

「じゃああの点滅は、エネルギーの消耗を知らせる信号か？」

佐沼の問いかけに、夏目は頷く。

「そして、三体のエネルギーであり、パラキュリアを撃破する際に発生した光の正体でもあるのが……ウルトラ粒子です」

一同がざわつく。そして止めを刺すように、夏目は続けた。

「ウルトラ粒子の力を持つ巨人、この三体は言うなれば……」

9 .

「神山陽介……確かにそう名乗ったの？」

「うん、綾音さんよろしくって……」

夏目の報告から数時間後、東京湾を横須賀へ向かうエクスマキナの甲板上にハルカと綾音はいた。

「そう、彼も生きていたのね」

「彼も……?」

「……………あなたになら話してもいいわね」

綾音は首につけていたロケットペンダントを外し、それを開いてハルカへ渡した。

そこには、アークの隊員服を着た青年の写真が納められている。

「天宮海。青い巨人、アビスの正体よ」

「え！？」

「彼と私、そして神山君は、半年前まで同じ部隊にいたの」

「それってまさか……………」

「アーク極東方面航空団第101要撃隊B小隊。最初の変異体ルシフェルグノー」と戦って全滅した部隊。二人も、その時の戦闘で……………」

「……………」

返す言葉が見つからず、ハルカは俯いて黙り込む。

「何て言ったらいいか、わからないよね？」

しばらく下を向いていたハルカは、ゆっくりと顔を上げて視線を海へやった。

「俺のせいだ……………俺がもっと早く駆け付けてれば、二人だつて……………」

やっとのことで言葉を搾り出したハルカを、綾音はじつと見詰めた。

「……………勘違いしないで。確かにあなたは特別な存在だけど、神様じゃない。人間だから、力が及ばない事だつてある」

「人間……………」

そうつぶやいたハルカへ、綾音は優しく頷いてみせた。

「あなたは、あの時できる精一杯のことをしたわ。それにあなたが助けてくれた時ね、まるで闇の中に光が差して、行く先を示してくれたようだった。あなたに導かれて、私は今ここにいるのかもしれない」

「俺はそんな……………たいそうなもんじゃないよ」

ハルカは再び俯く。が、直ぐに顔を上げた。

「けど、そう言ってもらえると、やっぱり嬉しいかな。なんで変身できるのかわかんないけどさ、俺の力が少しでも役にたったなら」  
ハルカは笑顔でそう答え、綾音もつられて笑った。

そして、綾音は言った。

「やっぱり、あなたには笑顔が似合うわ……ウルトラマン！」

10 .

エクスマキナは横須賀基地へ入港した。クルーの間にも、どこかほっとしたような空気が広がる。

「何はともあれ、ようやく落ち着けるぜ」

藤原の言葉に、CICの面々も頷く。

「こちらアーケ極東本部所属、エクスマキナ。入港許可願います」  
操舵士の早瀬竜二が基地へ通信を送る。そして数十秒後には返信が送られてきた。

「こちら横須賀基地。エクスマキナ、入港を許可します。3番埠頭へ入って下さい」

基地からの支持を受け、早瀬は舵をきる。

数分後、エクスマキナは3番埠頭へ碇を降ろした。

「おかしいわね……」

基地からの指示で乗艦ハッチを開けた時、真琴は異変に気づいた。メインパネルに映る埠頭の岸壁の上に、小銃を抱えて完全武装した自衛隊員が五十人近く立って整列している。

「雰囲気を変だ……」

佐沼がそう言ったとき、指揮官の合図でタラップが架けられ、隊員達がハッチへ殺到する。

あれよあれよという間に、隊員達は艦内に要所に散らばり、そのうちの1隊がCICへ駆け込んできた。

「What's happen?」

「なんだなんだおい!?」

アンリと藤原が動揺した瞬間、隊員達はクルーへ小銃を向けた。

「全員動くな!」

指揮官らしい男の一喝で、クルーは完全に固まってしまった。

同様に、艦内に散った各隊によってエクスマキナは完全に占拠されたようだった。

「これは一体、どういうことですか?」

真琴は困惑しながらも、男へ問いかけた。

しかし男はそれに答えることなく、冷たい視線を真琴に向けるだけだった。



1 .

「何すんねん！」

背中をどつかれた大槻は、兵士達に喰ってかかる。  
が、すぐに銃口を突き付けられて両手を上げてしまった。

「早く入れ」

言われるがまま、大槻は食堂に入る。

艦内食堂に軟禁されていたエクスマキナのクルー達は、連行されてきた大槻の姿を見て、何度目かの溜め息をついた。

「何でこんなことになっちまうんだよ、自衛隊は味方のはずだろ？」

藤原が隣に座る王へ小声で話しかけた。

「恐らく、艦の識別コードが確認されなかったのでは？」

エクスマキナはアーク内部でも極秘裏に建造されていた艦である。極東本部へ入港後、統合作戦部麾下の艦として正式に識別コードが登録される予定だったのだ。

しかし、入港の翌日に極東本部が壊滅し、アーク艦船としての登録がなされないまま、エクスマキナは海へ出た。

エクスマキナは今の所、どの国家や組織にも属さない所属不明艦アンノウンとして扱われていることになる。

「理屈はわかるけどさ、そんな理由で拘束ってやり過ぎじゃねえか？」

「多分、理由は二次、三の次」

王の思わせぶりな口調に、藤原は全てを察した。

「……なるほど。しかしよお、最高評議会の命令さえあればごうはならなかったぜ」

「最高評議会と言つても、最近は安保理がつるさく口出しして  
ますから。決定が下るまでは時間がかかるですよ」  
諦めたように、王は言った。

2 .

一方佐沼と綾音、そして真琴は、基地司令官室へと連行され  
ていた。

「率直にお尋ねします、我々を拘束した理由を教えてください」

真琴が、基地司令官の権藤に向かって口を開いたときだった。

「非常措置ですよ」

突然ドアが開いて、佐沼と同年代位の男が入ってきた。

「お前は……」

驚く佐沼に気づく様子もなく、男は言葉を続ける。

「初めまして。防衛省特殊戦略作戦室長の黒木といいます」

「特殊戦略作戦室？」

「統合幕僚会議直属の、対ルシフェルの戦略立案を目的とした非公  
開組織だ」

聞きなれない言葉に困惑する綾音へ、佐沼は落ち着いた口調で説  
明した。

「自衛隊にそんな組織が……」

真琴がつぶやき、綾音はハツとしたように佐沼を見る。

「隊長、なぜそんなことを？」

驚く綾音を見やり、黒木はニヤリとして言った。

「彼も以前は作戦室にいましたからね……お久しぶりです、  
結城士郎一尉」

「その名で呼ぶな！」

激昂して叫ぶ佐沼に、一同は仰天した。黒木は佐沼から目を反ら  
し、真琴に目を向ける。

「さて本題ですが、あなた方の潜水艦、エクスマキナと言いました

か？ 実はアークの識別コードが確認されなかったんですよ。まあ、協定があつたので基地への入港は許可しましたが、そこからの措置は保安上止むを得ないものと、ご理解いただきたい」

「ですが、この扱いは……」

真琴が言い終わらないうちに、被せるように黒木は言う。

「上層部からの決定が降りるまで、エクスマキナと搭載戦闘機、及び乗員を我々の管理下に置かせてもらいます」

「そんな、困ります！」

「今は非常時です。変異体ルシフェルの出現、それにあの得体の知れない三体の巨人、何が起こるかわからない状況下ではこうする以外にない」

有無を言わせぬ口調である。

「よろしいですね、参謀殿？」

黙りこむ真琴を、黒木は舐め回すように見つめる。

「黒木、キサマ……」

佐沼が黒木を睨みつけたその時、警備兵の一人が入ってきて権藤に耳打ちをした。

「艦内に民間人がいるようですが？」

「変異体の被害に巻き込まれて、海に投げ出されていたところを保護していました」

とつさに真琴の口を突いて出た嘘である。本当の事を言えば、ハルカがどうなるか知れたものではない。

「おかしいですね……被災者は川崎で全て降ろしたはずでは？」

黒木に嘘を見透かされ、真琴はしどろもどろになる。

「それは、その……」

困惑する真琴を、黒木はさらに舐め回すように見つめた。

エクスマキナから連れ出されたハルカは、基地施設の一角にある  
営倉へ放り込まれた。

独房の外には、三人の監視の兵士が立っている。

「またこのパターン、もう勘弁してよお……………」

悲痛な叫びが、施設の廊下へ虚しく響いた。

司令官室には権藤と黒木だけが残っていた。

「本当に大丈夫なのか？ この接収行動は上層部の許可なく行っているんだぞ」

権藤が不安そうに尋ねる。

「計画を完遂して既成事実さえ作れば、上層部も承諾しますよ。何せ、門外不出だったアークの科学技術の結晶を手にしていますからね」

黒木の言葉に不安の色はない。あくまでも強気である。

「……………だが肝心の彼らが渋っていては元も子もないぞ」

「その時は、あの民間人をダシに使うまでですよ」

黒木は更に言葉を続けた。

「これで自衛隊も、ルシフェルに対抗できる兵器を手に入れたことになる。もうPMC（民間軍事会社）崩れのエセ軍隊に、好き勝手させることもありません。あなたも長年の想いを遂げることができませんよ、権藤司令」

言いたいことを全て言ったのか、黒木は満足した様子で司令官室を後にする。

「浅はかだな……………だが始めてしまった以上は引き返せない、か」

ただ一人残った権藤はぼそりと言った。

「面白いことになった。例のアークの潜水艦、自衛隊に拿捕されたようだよ」

薄暗い会議室。円卓を囲んだ数人の男女が密談を交わしている。

「接收して自分達の戦力にする気かね？ 彼らは」  
「彼らに渡せば、子供に刃物を持たせるようなものね」  
「刃物？ とんでもない、拳銃を持たせるようなものさ」  
「やはり、今のうちに潰すに限るな」  
「しかし、またあの巨人どもがしゃしゃり出てくるぞ」  
「アビス、フレア、そして樹の倅か……」  
「ならば…… フォルニウス を出そうか？」  
「妙案だねえ……」  
不適な笑みを浮かべ、一同は頷いた。

4 .

一方、エクスマキナの艦長室には、艦内に戻された佐沼、綾音、真琴の3人が軟禁されていた。

「……結城というのは、俺の旧姓だ」  
綾音にそう言った佐沼は、決まりの悪そうにうつむいた。  
「そうだったんですか」

綾音がそう言うと、扉が開いて権藤が入ってきた。  
三人は権藤を睨む。だが権藤は動じることなく佐沼を見た。  
「結城一尉、いや、今は佐沼隊長だったな。まさか君がアークに入っていたとは」

「何か御用ですか」  
動揺するのを抑え、佐沼も権藤を見据える。  
「失礼する」と言って権藤は応接スペースのソファに腰を下ろし、向かい合って座った3人を見回すと、権藤は一呼吸置いて口を開いた。

「いずれ黒木から話はあると思うが、今は一人の自衛官としてお願いします。この潜水艦と艦載機を、我々に引き渡してもらいたい」  
「やはり、あなた方の狙いはそれでしたか」

権藤は無言で、真琴へ頷くと冷静な口調で言葉を続けた。

「今の状況下で、あの超兵器を効率的に運用できるのは我々だ。もうアークに戦いを任せることはできない」

「そんな……」

権藤の言葉に、真琴は絶句した。

「怪物と戦つてるとは言え、アークという組織は地球の平和の為だと称して我々の庭で好き勝手に暴れ、壊しまくって復興には手を貸さず、偉そうに格好をつけても結局はただ無意味に被害を増やしてただけだ。10年前の福山市、そして今回。アークは何も守れちゃいない！」

「ですが我々も、力が及ばなかったかも知れませんが、地球を守るために必死に戦ってきました」

綾音が思い切って反論するが、権藤は動じない。

「お嬢さん、守るための戦いとは、失敗の許されない戦い、絶対に勝たなければならぬ戦いのことだ」

「……」

「アークにとつてのそれは、ルシフェルを絶対に地上へ降ろさないことだったはずだ！」

権藤の、静かだがじわじわと伝わってくる気迫に、綾音はただ圧倒された。

「佐沼隊長、10年前に現場指揮官として、福山にいた君なら分かるだろう」

佐沼は微動だにしない。

「所詮は国連から金で雇われた傭兵集団、地球のために戦うとかぬかしたところで、結局はただの自己満足なんだよ」

止めの一言に、三人は言い返すことができない。権藤の言っていることは全て事実だった。

元々、アークはPMCを母体にして結成された組織である。

形式上は国連からルシフェル撃退の業務を委託されており、隊員は準国際公務員として扱われているが実際はアークの社員、つまりは傭兵だった。

「私のことは憎んでもらって結構だが、自衛隊には少なからずこういう感情を抱いている者がいるという事を知って欲しかった。」

「……引き渡しの際、よく考えて下さい」

権藤は席を立ち、入り口へ向かった。すると、それまで黙っていた佐沼が口を開いた。

「権藤司令、一つだけ言わせてください。黒木ですが、あの男のことは……」

立ち止まった権藤は振り返ることなく、佐沼へ答える。

「俺も完全に信用しているわけではない」

5 .

夜も更けてきている。

海上自衛隊横須賀基地を見下ろす小高い丘の上に、その男はいた。茂みの中に身を潜ませる男は、浮浪者と見紛うようなボロボロのロングコートを羽織り、頭にはくたびれたハットをかぶっている。

そして男は手にしていた赤外線付きの双眼鏡で基地の埠頭を覗き込んでいた。

視線の先にはエクスマキナがある。

「まずいな。警備兵が多すぎる」

双眼鏡から眼を離れた男は、コートのポケットからあるものを取り出す。それは一枚のSDカードだった。

「さて、どうやって知らせるか……」

SDカードを見つめ、男は独り言のようにつぶやいた。

「佐沼隊長、あなた、福山に……」

「ええ……」

「福山ディストラクション……のときですよ？」

恐る恐る尋ねる綾音に、佐沼はゆっくり頷いてみせる。

「福山ディストラクション」。それはアーク最大の失態として語り

継がれている事件だった。

10年前、アーク極東方面航空団と交戦したルシフェルの一群が広島県福山市へ降下。アークは追撃を行い、自衛隊も出動する中、市街地を舞台に戦いが行われた。

記録では、当時福山にあった陸上自衛隊の特殊火薬貯蔵庫がこの戦闘に巻き込まれて誘爆を起こした、とされている。

この貯蔵庫に保管されていた特殊火薬>スパイナークは、核兵器に匹敵する爆発力を持っていた。結果として市街地もろともルシフェルを葬り去ったのである。

アークにとつて苦い勝利に終わったこの戦いで、4762人の市民が犠牲になった。

その後、ルシフェルを空で喰い止められなかったアークには非難が殺到し、一時は不要論さえ出たほどだった。

権藤のように、アークに対して不信感を抱く者が相当数いるのも事実であろう。

「あの人も、護衛艦の艦長として福山に出動していましたから、気持ちは痛いほどよく分かる。私もかつてはそうでした」

「じゃあなぜ、あなたはアークに入ったの？」

真琴の問いかけに少し考え込むと、佐沼は言った。

「償い……ですかね。あの時、何も守れなかったことへの」

翌朝、黒木が自らエクスマキナへ乗り込み、真琴たちへ引き渡し  
の件を伝えた。

「お断りします」

真琴は決然と言う。それが3人で一晚話し合った答えだった。

「アークの科学技術は、現行の3世代は先を行くものです。これが流出すれば、社会に大きな混乱を引き起こしてしまうため、その使用は我々にのみ許され、使用目的もルシフェル戦に限定されました。これはアーク憲章にもうたわれています。今ここで、いえ、こつという状況だからこそ、我々がアーク憲章を曲げることはナンセ



ンスというものです」

「長台詞ご苦労様。あなたはもう少し話の分かる人だと思ったが、どうやら見当違いだったようだ」

黒木は真琴の訴えを鼻先で笑い飛ばし、部下の兵士に持たせていたノートパソコンを開いて見せた。

パソコンのエンターキーを叩く。すると、ディスプレイにハルカのいる独房の映像が映し出された。3人の眼が釘付けになる。

「彼の身柄は我々が預かっています。あなた方の反応から察するに、彼はただの民間人ではない。そう、何か特別な存在」

黒木はニヤニヤしながら3人の顔を眺めた。

「ま、それはこの際どうでもいい。取引です。彼を解放する代わりに、この艦と艦載機を引き渡してもらおう。もし断れば」

「黒木、お前正気か!？」

黒木は佐沼を見詰めて不敵に笑う。

その時、突然艦内に警報が鳴り響いた。

「何だ?」

「ルシフェルが出たんだ」

佐沼の言葉を聞いた黒木の表情が硬直する。

「CICに行かせてもらいますよ」

真琴に言われ、我に返ったように黒木は頷いた。

CICのモニターが、別々の場所に現れた2体の変異体を映し出している。場所は丹沢の山中と、三浦市郊外の田園地帯。

CICに駆け込んだ3人と黒木達は、映像を見て絶句した。

空に穴が開き、そこから変異体がミミズのように這い出して空中に浮遊している。

全長80m程の、東洋の龍に似た容姿。

「この変異体、下半身は別位相に存在していて、位相の壁を破ってこちらに出ようとしている」

コンピュータに向かった真琴がつぶやく。

「ではこいつらの全長は、この倍以上ということですか?」

真琴が綾音に譲りてみせると、コンピュータの画面が切り替わり、変異体のコードネームが表示された。

「コンピュータが認証したようね。変異体第5号、コードネームはフォルニウス」

6 .

木更津港に留まっていた海と陽介も、フォルニウスの存在を感じ取っていた。脳裏にフォルニウスのイメージが流れ込む。

「行くぞ陽介」

海は隣に立つ陽介を見る。早く戦いたくてウズウズしている様子だ。

「はい！」

元気よく応えると、陽介は一步踏み出し、左手首に巻いたブレスレットを胸の前に掲げた。

すると、ブレスレットに埋め込まれた赤い結晶が炎のような光を発して陽介の左手を包み込む。

そして陽介は上半身を左に捻ってタメを作ると、ブレスレットを勢い良く天に突き出した。

「うおおおーっ！」

気合いの入った叫びと共に、光が陽介の全身を包む。

海もスティック状のアイテムを天に掲げ、青い光に包まれた。

そして、木更津港の一角に巨大な火柱と水柱が上がる。

それらが消えた後に現れたのは、銀を体色の基調にした赤と青の2体の巨人、フレアとアビスだった。

フレアとアビスは互いを見やるとその場を飛び立ち、二手に別れてフォルニウスへ向かう。

怪獣映画のBGMを思わせる着信音が鳴り響き、黒木は携帯を開いた。

「もしもし　　ああ、先刻承知だ　　分かった、私はここから指揮を執る、いいいな！」

手短に通話を済ませると、黒木は乱暴に携帯を畳む。

「いよいよ特殊戦略作戦室の出番が来た」

「黒木、変異体に太刀打ちできるのはストライカーだけだ。俺達を出撃させてくれ」

「アークの兵器にはまだ使い道がある、大人しく見ている。いいか  
士郎、こちらには人質がいることを忘れるな！」

「お前、初めからストライカーを戦力として利用しないつもりだったのか……」

黒木は答えることなくCICを後にする。

すると、黒木が出て行くのと入れ違いに、モニターに新しい映像が映った。

「丹沢にアビス、三浦にフレアが向かったわ」

丹沢の山中。空に開いた穴から飛び出た長い身体をくねらせ、フォルニウスは空中に浮かぶアビスと対峙していた。

アビスを睨み付けたフォルニウスは、口を大きく開ける。すると周囲の空間が歪み、圧殺波動となってアビスへ襲い掛かった。

波動をもろに喰らったアビスはバランスを失い、そのまま谷底へと真つ逆さまに落ちていく。

アビスの姿が小さくなり、完全に見えなくなると、フォルニウスは勝ち誇ったかのように吼えて見せた。

だが次の瞬間、谷底から凄まじい勢いで水柱が噴き上がり、フォルニウスの顎へ命中した。アッパーカットを喰らった形になり、フォルニウスは身体を大きく後ろへ反らせる。

そして、渦を巻いて吹き上がり続ける水柱の中から、アビスが姿を現した。

やられたように見せかけ、谷底を流れる川を利用して水の竜巻>スプラッシュ・サイクロン<を作り出していたのだ。

アビスは右手を開き、スプラッシュ・サイクロンをフォルニウスの方へ押しやった。

すると竜巻は無数の水玉へ分解し、フォルニウスへ襲い掛かる。仙台で使用した技>スプラッシュ・バースト<である。

フォルニウスが怯んだその隙を突き、アビスは胸の前で絶対零度光弾>スフィアエリクサー<を生成、右手に持つとフォルニウスへ肉薄し、ハンドボールのシュートを決めるようにそれを投げつける。スフィアエリクサーを喰らったフォルニウスは、一瞬で氷結すると粉々に砕け散った。

三浦市の郊外。バイパス沿いに建つ大型ショッピングセンター目掛け、フォルニウスは圧殺波動を発射する。

だが間一髪、駆けつけたフレアがそれを受け止めた。

田んぼにしっかりと足をつけて踏ん張る。やや押されたものの、ショッピングセンターへ到達する前に波動は消えた。

逃げ遅れた買い物客達がフレアを見つめる。フレアは彼らに背を向けたまま、ガッツポーズを決めてみせ、フォルニウスへ飛び掛っていく。

一直線に飛んだフレアは右拳を赤熱化させ、必殺拳>バーニングフィスト<をフォルニウスの頭部へ叩き込んだ。

フォルニウスが断末魔をあげて炎上、消滅する。

7 .

「やった！」

CICのモニターを見つめていた佐沼が歓声を上げる。

「待つて、これは……」

真琴の表情が曇る。監視の兵士達も、モニターを見つめて愕然となった。

アビスとフレアが勝利に安心したその瞬間、再び穴が開いてフォ

ルニウスが飛び出してきたのだ。しかも複数体。

「そんな……」

絶句する綾音。

アビスとフレアは、戦いを再開する。

黒木が基地の中央司令室に入った時、大型ディスプレイには数で圧倒されて苦戦する、2人の巨人の様子が映されていた。

「黒木、ここはアークの新型機を使うべきだ。この際、彼等に協力を仰いでも」

「室長の私は緊急時において、陸・海・空の全部隊を指揮下に置くことを認められています。基地司令と言えど口出しは無用、ここは私のやり方に従ってもらいます」

動揺する権藤を遮り、黒木は自信満々な様子で言った。

「他に手があるとでも？」

「空自の百里基地にはスパイナーが保管されています。今からスクランブルをかけて攻撃機にスパイナーを搭載させ、巨人もろともルシフェルを空爆するんです」

「馬鹿な！ そんな事をすれば福山の二の舞、市民が巻き添えになるぞ」

「私の仕事は敵に勝つか負けるかです。幸い、敵はまだ人口密集地に到達していない。今なら最小限の犠牲で奴らを葬れます！」

「本気で言ってるのか？」

「多少の犠牲には目を瞑らなければ、勝つことはできませんよ、権藤司令。あなたも戦う覚悟があるなら、ルシフェルの殲滅を第一に考えるべきだ」

「だが今ストライカーを出せば、その小さな犠牲を払うこともない、それとも何か出撃させたくない理由があるのか？」

黒木は一瞬眉をピクリとさせたが、権藤を無視してオペレーターに指示を出す。

「百里基地にスクランブルを」

と、その時、オペレーターの一人が素っ頓狂な声を上げた。

「基地の直上に、ルシフェル出現！」

「何だと!?」

大型ディスプレイには、基地上空で身体をくねらせる、フォルニウスの禍々しい姿が映し出されていた。

「権藤より停泊中の護衛艦へ、直ちに攻撃を開始せよ！」

動揺し、固まってしまった黒木に代わり、権藤が指示を出す。

フォルニウスはエクスマキナの姿を見つけると、そこへ向かって圧殺波動を発射する構えを取った。

だがそこへ、基地に停泊していた護衛艦>ひえいくから発射された対艦ミサイルが炸裂し、フォルニウスの圧殺波動はわずかに反れ、基地施設の一つに直撃した。

「あいつ、エクスマキナを狙ってる!?!」

綾音の言葉で、CICに動揺が広がる。

その時だった。

大破した施設のカレキの中から、突然緑色の光が噴き出し、光の中から巨人に変身したハルカが姿を現した。

「あ、あれは……」

兵士達が呆気にとられる。

「ウルトラマン　ハルカ」

そうつぶやくと、綾音はハルカを見つめた。

ハルカは何かを手の中に抱いているようだった。エクスマキナの乗降タラップの側に素早く着地すると、ハルカは両手をゆっくり地面に下ろす。

ハルカの手の中にいたのは、3人の兵士だった。施設が攻撃を受けた瞬間、変身すると同時に監視の兵士達を助け出していたのだ。

タラップの側に降ろされた兵士達は、ハルカを見つめた。

「俺達を、助けてくれたのか?」

ハルカは無言で3人を見つめると、すぐに背を向けてフォルニウスへ向かっていった。

飛び掛るハルカは、両腕の手甲から光の刃>シャイニングエッジを生成し、フォルニウスの胴を切断した。微粒子になって消えるフォルニウス。

だが再び空に穴が、ハルカを囲むように空いたかと思うと、そこから飛び出した4体のフォルニウスが両腕と両足に絡みついた。

ハルカは大の字になり、空中に捉えられた格好になる。

さらに、五つ目の穴が開いて、そこから飛び出したフォルニウスがエクスマキナを狙う。

ひえいと、同じく停泊中だった護衛艦>きりしまくが、ミサイルと艦砲射撃でフォルニウスを迎撃してエクスマキナを守る形になった。

8 .

「………違う、フォルニウスに下半身はない。今視認できているのは、別位相に存在しているコアから別れた、言わば枝葉よ」

コンピュータに向き合っていた真琴が佐沼と綾音へ言った。

「つまりコイツらの元を辿れば、一つのコアに行き着くということですか？」

真琴は綾音へ頷いてみせる。

「ええ、フェイズサーチレーターで座標位置も特定できたから、あとはその位相に突入すれば、フォルニウスを殲滅できるわ！」

「だったらなお更、ストライカーが必要なのに………」

佐沼は歯噛みをしながらモニターを見つめた。

アビス、フレア、そしてハルカの胸の結晶体が点滅を始めている。

佐沼は思い切ったように監視の兵士へ詰め寄った。

「おい、通信機を貸せ！」

「え？ しかし………」

「うるさい！」

兵士は佐沼の剣幕に押され、力なく頷く。

佐沼は強引に、兵士が頭部につけていたインカムをむしり取った。

中央司令室では、我に返った黒木が再び指揮を執っていた。

「攻撃続行、敵をエクスマキナに近づけるなあ！」

「黒木、あの緑の巨人も助けるべきじゃないのか？ アイツは基地を守ろうと……」

「黙れ！ 指揮官はこの僕だ！」

黒木の目には、狂気の色さえ浮かんでいるようだった。権藤も思わず後ずさってしまっ。

その時、権藤と黒木がつけていたインカムに、佐沼の声が聞こえた。

「権藤司令、佐沼です。拘束を解いて我々を出撃させて下さい、お願いします」

権藤はゆっくりと頷き、黒木を見る。だが黒木は聞く耳持たない様子である。

「ダメだ！ 許可はできん！」

「あなたの覚悟は本物だ。あの日、福山が壊滅する様を海の上から見ているしかなかった、あなたの悔しさはよく分かる。俺も同じ気持ちだった」

佐沼は説得を続ける。

「惑わされるな！ 今エクスマキナとストライカーに何かあったら、アークの科学力が手に入らないんだぞ！」

激昂した黒木が叫ぶ。傍からみれば、完全に常軌を逸しているようだった。

「だからこそ俺は、守るためには行動を起こさなければならぬと思っただけなんだ。あなたがこの行動を取ったのも同じ理由だろ？ 守るために戦う覚悟なら、俺もあなたに負けちゃいない！」

眼を閉じて考え込む権藤へ、黒木はインカムを外し、急に口調を穏やかにして言い寄った。



「いいか、アークの兵器を無傷で持ち帰れば、それを基に超兵器を量産することができる。自衛隊は世界最強の軍隊として、覇権を握ることができるんだ。その功労者として、僕らの将来も約束されるんだよ……」

それを聞いた瞬間、権藤は眼を開いて黒木を見据える。悲しい瞳だった。

「貴様、最初からそれが目的だったのか？」

黒木はハツとして、口をつぐむ。

「権藤司令、行かせてくれ。例えあなたの言うように自己満足でしかなかったとしても、何もしないよりはるかにマシだ！」

権藤は頷くと、インカムを口元へ動かした。

「エクスマキナ艦内の全部隊に告ぐ、乗員の拘束を直ちに解除せよ……エクスマキナへ、当基地への救援を要請する！」

黒木は怯える子供のように、権藤から目を反らす。

権藤は右手で黒木の制服の襟を掴むと、左手で黒木の顔をひよつとこのようにして掴み、じっと見据えた。

「ほんの一瞬でも、貴様を信じてスタンドプレーに付き合った俺が馬鹿だった」

涙ぐむ黒木を、権藤は乱暴に突き放した。勢いあまって、黒木が床に転がる。

権藤は黒木を見下ろし、決然と言い放った。

「我々の使命は、国民の命と安全を守ることだ。貴様のような奴には、何も守れない！」

9 .

拘束が解かれ、クルーは各々の持ち場へ散っていく。

艦内を制圧していた兵士達は、真琴の指示で艦中央ブロックへ集められた。その中に、ハルカに助けられた3人の兵士達もいた。

3分もしないうちに、エクスマキナのカタパルトデッキが開放さ

れる。

1号機にはアンリと藤原、2号機に佐沼と王、そして3号機には綾音と光一が乗り込み、ストライカーは空へ飛び出した。

「アンリ、樹を助ける」

「了解！」

2号機に乗る佐沼の指示を受け、アンリの操縦する1号機は編隊から突出すると光子ブラスターでフォルニウスを攻撃し、あっという間にハルカを解放した。

1号機はそのまま空中で宙返りすると、再び編隊に加わる。

「いいかみんな、CICから入力された座標にコイツらのコアがある、そいつを潰せば、アビスとフレアも助かる」

(海、神山君……もう少しの辛抱よ)

綾音はディスプレイに映る座標を睨みながら思った。

「これよりストライカーを合体させ、コアの存在する位相へ突入する、合体制は1号機に託す。藤原、頼むぞ！」

「了解！」

佐沼の指示に、藤原が高潮した様子で答える。

「いきますよ……オールストライカー、ドッキングモード！」

藤原の合図で、3機のストライカーが瞬時に変形する。

1号機の主翼が後ろへスライドして ジェネレータの側面に移動し、2号機のコクピットブロックが垂直にせり上がり、主翼が ジェネレータを包み込むように倒れる。

そして3号機のコクピットブロックが克蘭クアームの可動によって、ジェネレータの真上にせり上がった。

「ジェネレータ、エンゲージ！」

ストライカーが1・2・3号の順に一直線に並び、超電磁誘導で合体、連結されて一本の細長い円筒となった ジェネレータを基幹とする、一機の大型戦闘機の形になる。

「連結完了。トリプルジェネレータ、起動！」

藤原が大型レバーを引くと、連結されたジェネレータの基軸が轟音を上げて回転し、機体がおびただしい量のウルトラ粒子に包まれた。

「ハイパーストライカー、Burn up！」

藤原がパネルのスイッチを入れると、機体を覆った粒子が瞬時に吹き飛ぶ。

そして、黒かった機体の色が鮮やかなオレンジに、ボディを走る金のラインが黒に変わった超次元統合戦闘機 ハイパーストライカー が完成した。

「突入するぞ、アンリ！」

佐沼が叫ぶ。

「了解。トリプルジェネレータ、シフトD！」

操縦を担当するアンリが起動レバーを引く。

ハイパーストライカーが一気に加速、前方に集約されたウルトラ粒子がスパークし、空間に亀裂が生じた。

「各員、衝撃に備えろ、デイモンションダイヴ、スタート！」

ハイパーストライカーは更に加速し、亀裂の内部へ突入、姿を消した。

「ハイパーストライカー、突入を確認！」

「後は成功を祈るだけね こっちもやるわよ、護衛艦と協力してフォルニウスを攻撃、樹君を ウルトラマンを援護します！」

真琴の号令で、エクスマキナからもミサイルが発射される。

アーク、自衛隊、そしてウルトラマンが一丸となり、基地を守るためにフォルニウスと戦っていた。

別位相への突入に成功したハイパーストライカーは、フォルニウスのコアに肉薄する。

空中に浮遊するコアは透明な膜に覆われ、その膜の表面からフォルニウスの胴体が無数に生えている。

そしてその胴体は、周囲の空間に空いた次元の穴へ向かって伸びていた。

「スマツシャー、スタンバイ」

佐沼の指示で、火器管制を任せられた綾音がパネルの起動スイッチを入れる。

すると機首が展開し、ウルトラ粒子収束火線砲　スマツシャーの砲身が現れた。

「トリプルジェネレータ、シフトB。全力運転！」

トリプルジェネレータが唸りを上げて回転し、スマツシャーの砲口に金色の粒子が満ち溢れる。

「粒子チャージ率、100%」

「ターゲット、ロックオン。スマツシャー、ファイア！」

綾音の言葉を受け、光一が発射トリガーを引いた。砲身から発射された粒子光線がコアを貫く。

コアは大爆発を起こし、微粒子となって消し飛んだ。

アビス、フレアと戦い、基地を襲っていたフォルニウスも、全て消滅した。

「フォルニウス、消滅を確認」

報告を聞いた真琴は胸をなで下ろす。

権藤もまたそうであった。

「佐沼、お前の覚悟、見せてもらったぞ」

丹沢の上空に、アビスは一人佇んでいた。

（勝ったのか　いや、負けだな）

一町歩はあろう田んぼの中に立ち、フレアはバイパスを眺めた。バイパス沿いに被害はない。

(守りきれた　俺は勝った！)

そう思った時、足元に非難していた人々が集まってきた。そして皆、フレアを見上げると大きな喝采を送る。

(照れるじゃねえか！)

フレアは再びガッツポーズを決めてみせると、逃げるようにその場を飛び立って行った。

10 .

ハルカが地上に降り、人間の姿へ戻ると、そこへ、真琴とロメラの一同が駆け寄って来た。

「樹、よく頑張ってくれた！」

佐沼がハルカの肩を叩く。

「また牢屋に入れられた時は、どうなることかと思ったけどね」  
相変わらずの飄々とした様子に、皆の顔が綻んだ。

すると、向こう側から権藤に率いられた基地の隊員達がやって来た。先にエクスマキナから降ろされた兵士達もいる。

「ひよつとして、今の見られたんじゃない？」

「やべえぞそりゃあ」

アンリと藤原が小声で話していると、権藤が歩み寄ってきた。

ロメラと自衛隊、双方に緊張が走る。権藤はハルカをじつと見つめると、深々と頭を下げた。

「部下を助けてくれたこと、感謝する」

そして、頭を上げた権藤が姿勢を正すと、隊員達も後に続いて姿勢を正す。

「当基地を救ってくれたアークの戦士と、大きな助っ人に対し、敬礼！」

権藤以下、自衛隊員達は一斉に敬礼をした。

真琴とロメラも、敬礼を返す。ハルカも恥ずかしそうに会釈を返した。

「これから、どうするんですか？」

「黒木の暴走に加担してしまったんだ、処分は免れんだろう」  
佐沼の問いかけに、権藤はさらりと答える。だがその顔には一  
点の曇りもなく、清々しささえ感じられた。

「権藤司令、樹君のことですが」

「なんの事かな？ あの青年が巨人に変身するとか、私は知らないよ」

惚けたように権藤は言う。

真琴は、ただ黙って頭を下げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0801f/>

---

ウルトラマン・THE・EDGE

2011年4月18日01時56分発行